



# 建築と社会

Architecture and Society

特集 第32回 会員特集  
“私の空間作法”

2026 02  
vol.107 No.1247  
日本建築協会

## 未来に残せる仕事を!

ドローンによる建物(壁・屋根等)・橋梁等(水管橋)やイベント(運動会・催事等)の撮影、  
赤外線カメラによる調査のご依頼お待ちしております。

鴻池新田会所と旧河澄家を指定管理者として文化財管理をしております。ぜひ、お越しください!



- ドローン撮影・ドローン調査
- 特殊建築物・設備定期調査
- 指定管理者
- 消防設備点検・防災点検
- ボイラ・電気設備・空調設備・給排水等保守管理
- ねずみ・こん虫防除
- 空気環境測定
- 清掃管理業務
- 貯水槽清掃
- 警備業務(施設警備・機械警備)
- 総合案内(受付・電話交換)



建物のことならアスウェルへ!

株式会社 アスウェル

〒583-0876

大阪府羽曳野市伊賀 5-1-4

TEL:072-939-7861(代)

FAX:072-952-4304

<http://www.asuwell.co.jp>

[mail@asuwell.co.jp](mailto:mail@asuwell.co.jp)



(株)アスウェル



鴻池新田会所



旧河澄家



## 日本建築協会 事務局からのご案内



U-35委員会の協力により、執務ブース・会議机・  
窓際カウンターなどを一新しました(詳しくは  
『建築と社会』2025年6月号44-51頁に掲載)

会員の皆様には、大川が一望できる窓辺の  
ワークスペースを、タッチダウンオフィス  
としてご活用いただけます。

【利用できる方】一般社団法人日本建築協会の正会員の方

【利用可能時間】10:00~17:00(但し、イベント、会議実施中はご使用いただけません。

利用状況は協会のInstagramにアップされていますが、  
電話で確認することをお勧めします。☎06-6946-6981)

【利用可能場所】窓側カウンターテーブル4席、窓側大テーブル8席程度

【電源】PC用の電源は用意があります。

【その他設備】コピー機のご利用は可能です。(大量のコピーはご遠慮ください)

Wi-Fiはご使用いただけます。(リモート会議はご遠慮ください)

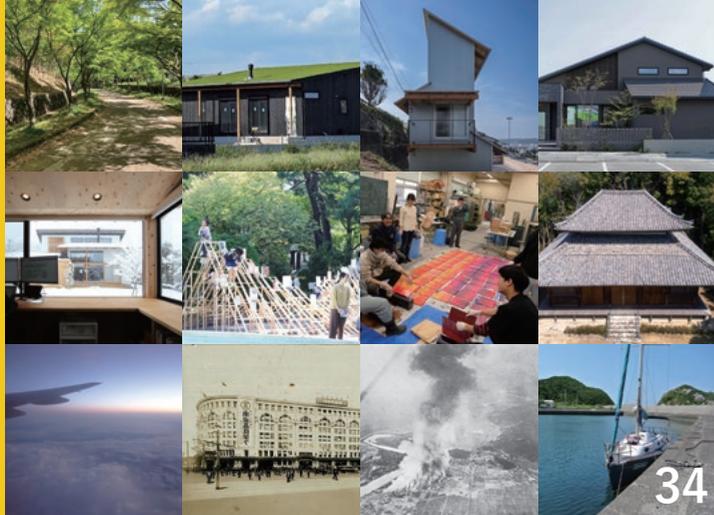
【喫食について】飲物の持ち込みは可能ですが、食べ物の持ち込みはご遠慮ください。

(冷蔵庫内のペットボトルは自由にお飲みいただけます)

【その他】他の会員様の迷惑になるので、複数名での会議等はできません。

Instagram





2025年度 年間特集テーマ「未来」  
**特集 第32回 会員特集**  
**“私の空間作法”**

1970 思い出の風景 2025 建築家の旅の続き ●塚口明洋 35  
 薄くて軽い緑の屋根から思いを馳せる ●渡辺智恵 36  
 地形と呼応する建築 ●吉永規夫 37  
 家族の物語を紡ぐ住まい ●岸 38  
 構造設計の信念を暮らしに刻む ●朝日智生 39  
 小さな丘のような学祭の居場所 ●水谷俊博 + 武蔵野大学水谷研究室 40  
 カラフルな学生生活、その中心となる場所 ●今村友里子 41  
 330年余り手付かずの本瓦の葺替えと瓦下地の保存の試み ●上田寛彬・吉永規夫 42  
 Around the World ; 海外渡航-18 都市と建築 / 地球一周を巡る ●加藤正浩 43  
 絵葉書の中の大正から昭和の大阪 ●豊田充広 44  
 もうひとつの大震災 ●澤田純一 45  
 過去に思いを馳せ左舷着けとする ●柏原忠明 46



ひと・まち・建築

gallery

21

6

# 建築と社会

Architecture and Society  
 Journal of the Architectural Association of Japan  
 日本建築協会  
 2026 02  
 Vol.107 No.1247

■特集予告  
 ●3月号 / 東海支部  
 ●4月号 / 未定

475

設備  
の頁

48

665

法令  
コーナー

49

ご意見ご要望は  
こちらから

51



project 岩谷産業神戸研修所 2

gallery かどのいえ ●金沢貴允 6

大阪・関西万博の風景 3/3 7

アフター万博 藤本壮介氏特別インタビュー「大阪・関西万博の総括」 14  
 6 社共催イベント 組織設計事務所とゼネコン設計部から  
 語る「万博から生まれた可能性とこれからのまち・建築に  
 ついて」 21

Member's Our impressions after visiting the World Expo  
 Forum ●2040委員会 26

会告 会員の集い IN TOKYO 田原幸夫氏 講演会と会員交流懇親  
 会のご案内 28  
 第9回片岡安賞(日本建築協会論考コンクール) 一次審査  
 通過論考発表、第9回片岡安賞 一次審査通過者によるオン  
 ライン 公開プレゼンテーション 視聴者募集のお知らせ 29  
 第11回学生のための現場見学会「新・琵琶湖文化館(博  
 物館) 現場見学会」(第1回/全2回) 30  
 出版委員会主催 第9回建築セミナー 31  
 協会誌『建築と社会』掲載文における「著作権」について  
 のお知らせとお願い 32  
 若き創造者たちへ「第73回青年技術者顕彰」のご案内 33

設備の頁 再エネを最大限活用するエネルギーマネジメントシステム  
 ~T-Green BEMS RE Optimizer~ ●清水博之 48

法令コーナー 京都市の建築基準法適用除外指定制度これまでとこれから  
 ●向井(北岡)愛 49

入賞発表 「第44回大阪都市景観建築賞(愛称 大阪まちなみ賞)」  
 の受賞作品が決定 50

再読 「相合橋」水上広場としての第一号の橋  
 関西の建築 -相合橋の修景整備- ●阿部文和 51

Member's 第38回『茶室』見学会 55  
 Forum U-35委員会企画「建築と集合知」-「集合知」で考える、  
 かけ算ワークショップ-活動報告 56

information 昭和100年記念 あの頃は~栖鳳・魁夷・又造らが起こ  
 した昭和の風~/KYOTO NIPPON FESTIVAL 2026 -時  
 をこえ、華ひらく庭~/万博のレガシー -解体と再生、  
 未完の営為を考える~/生誕100周年記念 安野光雅展 58

月間の動き 2025年12月 60

表紙写真撮影: 武蔵野大学 水谷俊博研究室

## 岩谷産業神戸研修所

建築主 岩谷産業株式会社  
 設計・監理 大林組  
 施工 大林組

環境と寄り添う  
研修所

神戸市ポートアイランドに建つ研修所。事業主は水素の活用を通じ脱炭素社会の実現に取り組む水素、LPガス業界のリーディングカンパニー。海に臨む立地を活かした木造ハイブリッド構造の研修所は水素をエネルギー源として利用する。脱炭素の未来を拓く多様な人材を育成し、水素エネルギー事業の情報発信拠点ともなる。

## [大林組 設計]

山田修司 (やまだ しゅうじ)



1990年大阪工業大学工学部建築学科卒業、同年大林組入社。  
 現在、大林組設計本部大阪建築設計第五部 部長

西森史裕 (にしもり ふみひろ)



2005年大阪大学大学院工学研究科建築工学専攻修了、同年大林組入社。  
 現在、大林組設計本部大阪建築設計第七部 課長

余田尚紀 (よだ なおき)



2010年立命館大学大学院理工学研究科修了、同年大林組入社。  
 現在、大林組設計本部大阪建築設計第五部 課長

綾塚郁宏 (あやつか いくひろ)

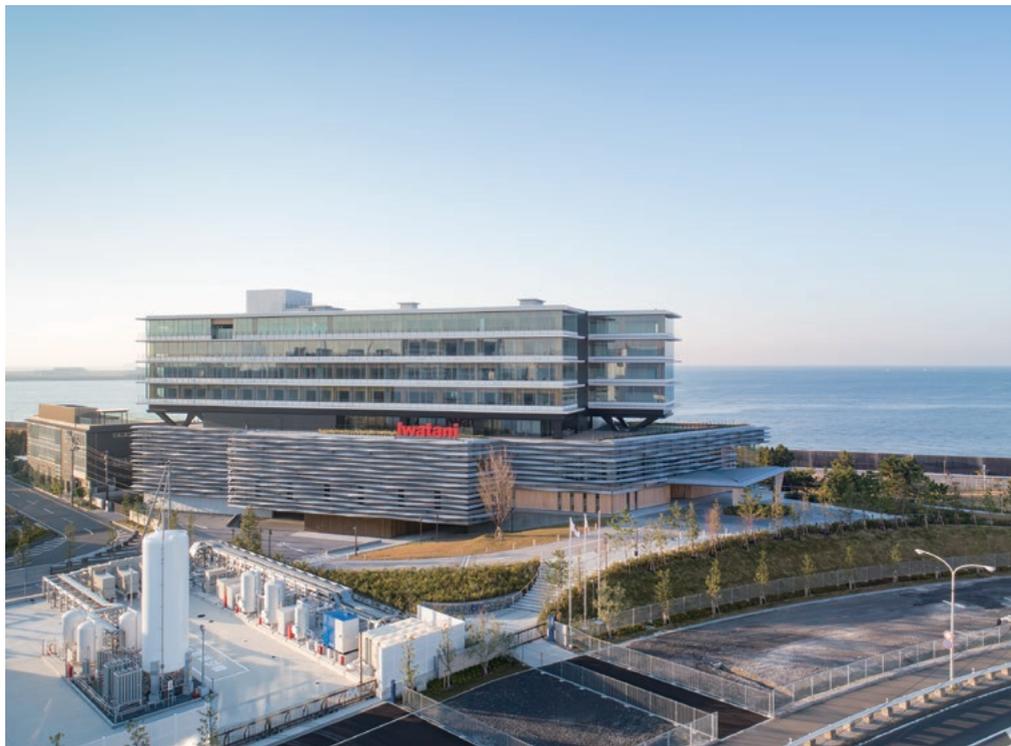


2017年九州大学大学院人間環境学府空間システム専攻修了、同年大林組入社。  
 現在、大林組設計本部大阪建築設計第七部 主任

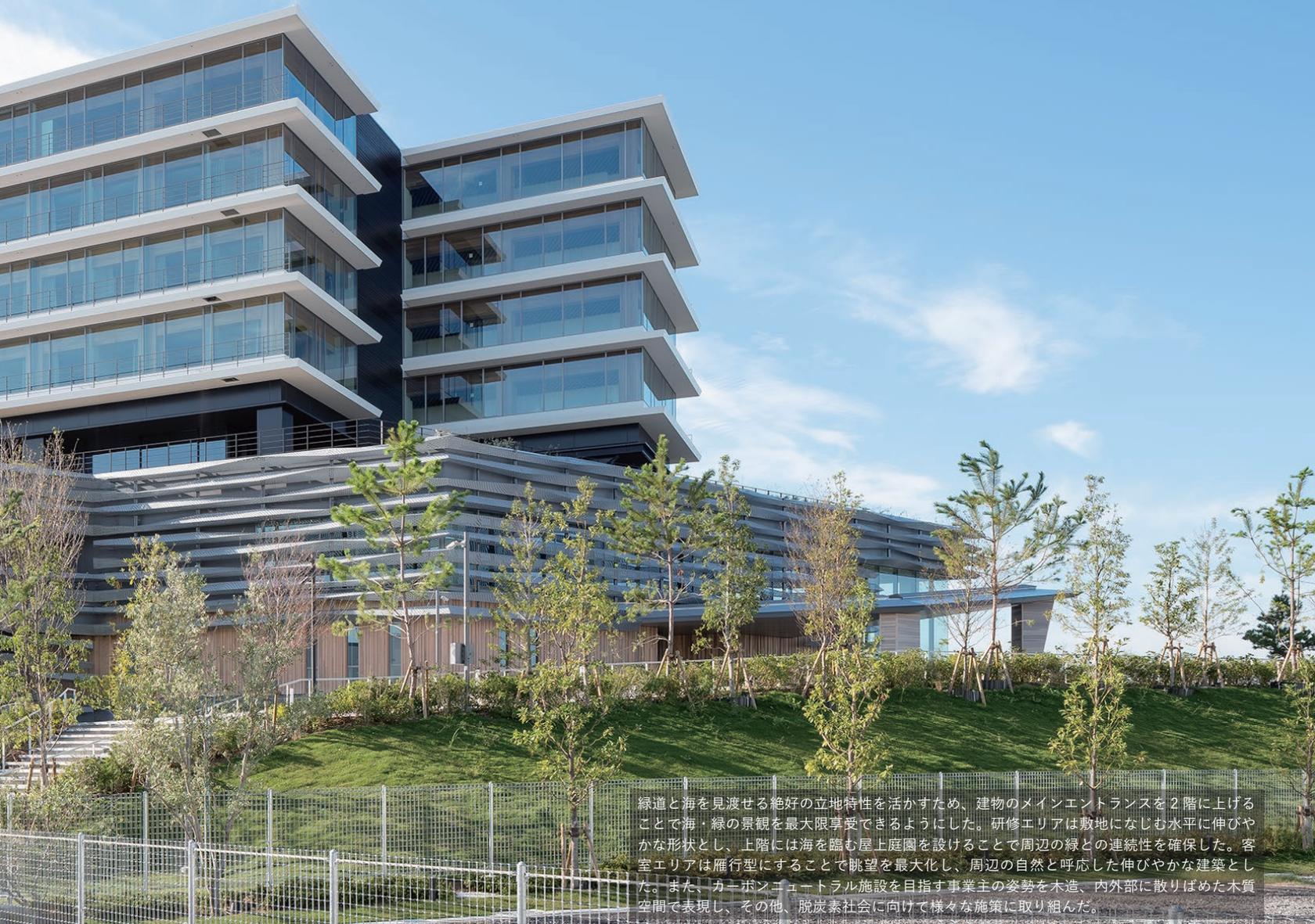
渡辺雄二 (わたなべ ゆうじ)



1988年熊本大学環境建設工学科卒業、同年大林組入社。  
 現在、大林組大阪本店 作業所長



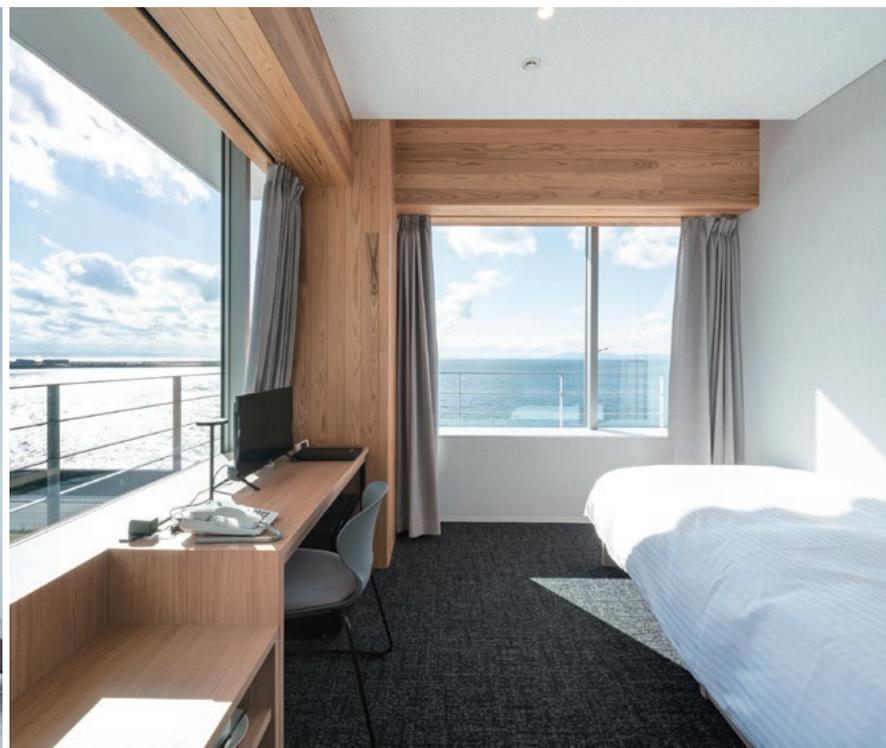
水素を貯蔵するエネルギープラントをもつ研修所



緑道と海を見渡せる絶好の立地特性を活かすため、建物のメインエントランスを2階に上げることで海・緑の景観を最大限享受できるようにした。研修エリアは敷地になじむ水平に伸びやかな形状とし、上階には海を臨む屋上庭園を設けることで周辺の緑との連続性を確保した。客室エリアは雁行型にすることで眺望を最大化し、周辺の自然と呼応した伸びやかな建築とした。また、カーボンニュートラル施設を目指す事業主の姿勢を木造、内外部に散りばめた木質空間で表現し、その他、脱炭素社会に向けて様々な施策に取り組んだ。



海を一望する木質化したエントランスホール



木架構を魅せる客室



水面のようにきらめく有孔鋼板



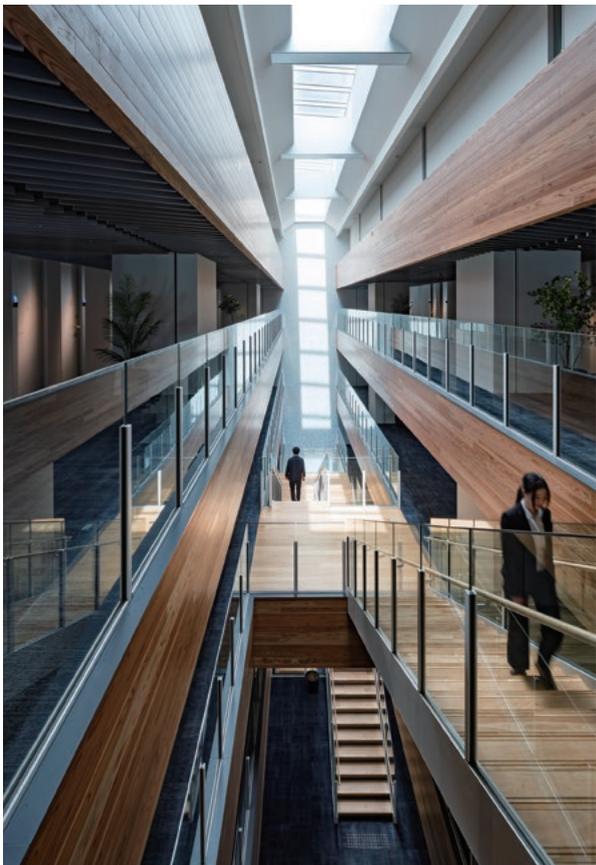
透明感とゆらぎのファサードデザイン



水素のリーディングカンパニーである事業主のイメージを低層部の「水面（みなも）」ファサードで表現した。「水面」の有孔鋼板の形状と孔のパターンはコンピューショナルデザインにて自然な水面を3次元曲面で生成し、表情豊かなファサードを実現した。

また、交流を育む研修所とするために2～8階まで貫く明るく開放的な吹抜空間（ECOヴォイド）を建物中央に設けた。ECOヴォイドに階段を設けて各エリアをつなぎ、ECOヴォイドに人を誘引する。各階にSPRING（湧き水）ラウンジを散りばめることで空間を立体的にゆるやかにつなげた。研修所が人材育成の場だけに留まらず、企業や部門を超えた情報発信や交流の場となり、脱炭素の未来を拓く多様な付加価値創造の場とした。

（山田修司・西森史裕・余田尚紀・綾塚郁宏／大林組）



光と風を導くECOヴォイド



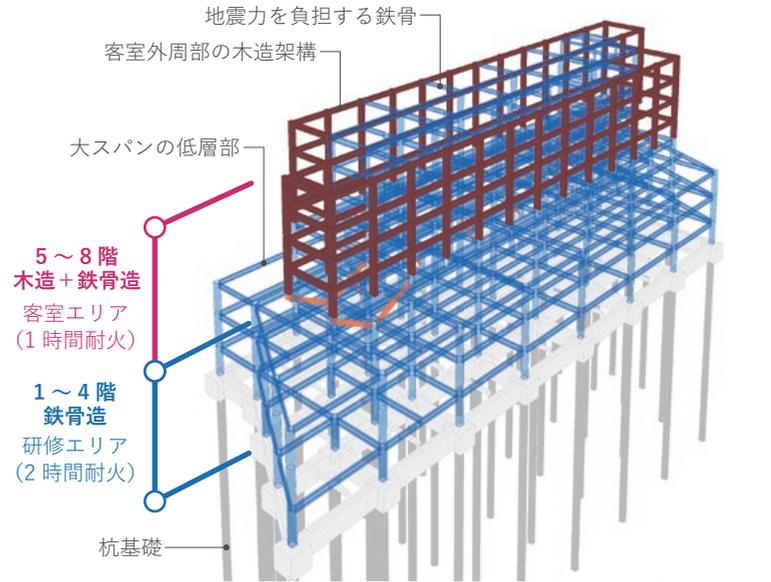
ECOヴォイドとつながるSPRINGラウンジ



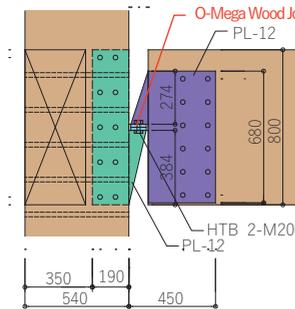
海と緑とつながる2階SPRINGラウンジ



外周部を木造とした魅せるハイブリッド構造



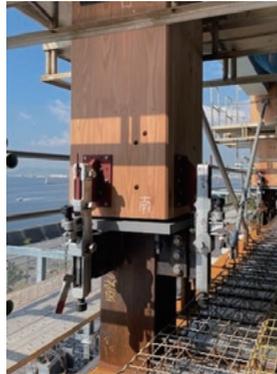
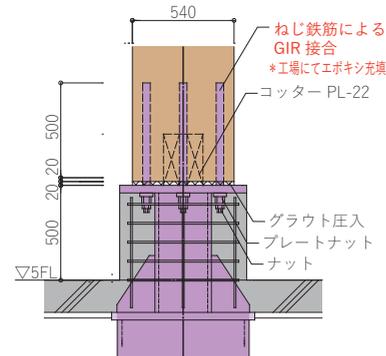
■木柱・木梁のピン接合部ディテール



カーボンニュートラル施設を目指す事業主の姿勢を木造で表現した。大空間が必要な低層階の研修エリアは鉄骨造とし、短スパンで構成できる上層階の客室エリアを木造と鉄骨造のハイブリッド構造とした。木造を1時間耐火となる上部4層の客室エリアの外周部に採用することで、インテリアとファサードの双方で木を感じられる計画とした。木造柱梁断面を小さくするため、長期荷重は木架構、地震力は鉄骨造で負担させる合理的な計画とした。木柱と木梁のピン接合部は柱梁の挿入プレートに鉛直方向にボルト締めする納まりとし、接合部に回転剛性を持たないディテール：O-Mega Wood Joint Wピンを開発した。

(山田修司・西森史裕・余田尚紀・綾塚郁宏／大林組)

■木柱・鉄骨柱のGIR接合部ディテール



鉄骨造と木構造のハイブリッド構造は当社の施工実績がない工事だったこともあり、品質確保のために様々な検証を事前に行った。

鉄骨柱と木柱の取合いでは、ネジ鉄筋の精度を確保するため木柱側に下向きのネジ鉄筋を入れてエポキシ充填を行う工法を採用し、精度の確保と現場でのエポキシ樹脂充填の手間を省いた。木梁において耐火性能に寄与する耐水強化石膏ボードのオフサイト施工を実施した。立案当初は先行施工に伴う劣化（降雨によるカビ発生や車両運搬に伴う小口の傷み）の懸念があったが、モックアップによる事前のばく露試験により品質に問題ないことを確認した。オフサイト施工により工事現場での大幅な作業ボリュームの削減や工程の短縮を実現し、現場での災害防止にも寄与した。

また、施工段階のアップフロントカーボン削減において様々な施策に取り組んだ。建設現場事務所は木造CLTユニット建築を採用し、太陽光発電とグリーン水素による燃料電池発電による創エネと省エネにより国内で初めて建設現場事務所でZEB認証を取得した。その他、低炭素型コンクリートや鉄筋溶接にハイドロカットの採用等により283tのCO<sub>2</sub>を削減し、380tのCO<sub>2</sub>固定化を実現した。

(渡辺雄二／大林組)

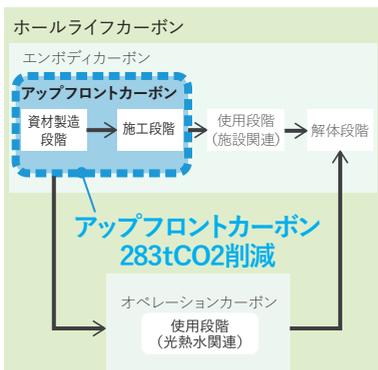


モックアップによる施工性の確認



耐水ボードをオフサイト施工した木梁

■アップフロントカーボン削減取り組み



【資材製造段階】

- ・木造、木質化 : ▲200tCO<sub>2</sub> 281tCO<sub>2</sub>固定化
- ・低炭素型コンクリートの採用 : ▲58tCO<sub>2</sub>

【施工段階】

- ・建設現場事務所の木造化 : 99tCO<sub>2</sub>固定化
- ・建設現場事務所のZEB化 : ▲20tCO<sub>2</sub>
- ・GLT燃料の採用 : ▲3.5tCO<sub>2</sub>
- ・鉄道によるグリーン水素輸送 : ▲1.2tCO<sub>2</sub>
- ・ハイドロカットの採用 : ▲0.35tCO<sub>2</sub>



所在地 兵庫県神戸市中央区港島南町7-2-1  
敷地面積 10,069.70㎡  
建築面積 2,714.34㎡  
延床面積 14,029.72㎡  
構造規模 鉄骨造一部木造、地上8階塔屋1階  
工期 2023年2月~2024年10月  
撮影 ヴィブラフォト 浅田美浩

かどのいえ

[企画・設計・施工・運営]

金沢 貴允

地域にひらかれた  
くつろげる場所として

当初は総合展示場のように工務店の家づくりを体感していただく施設として建設する予定として計画は始まりました。

しかし、検討を重ねているうちに家づくりに興味のある方だけが出入りする施設してしまうよりも、お近くの方々に気軽に寄っていただき、ちょっとした待ち合わせの待ち時間にコーヒーを飲んだり、季節の農家さんのフルーツや野菜の販売や雑貨の販売、各種イベント開催などによって地域に貢献できるような施設にしたいという思いが生まれてきました。

そうして生まれたのが「かどのいえ」です。

構造材については、田辺の山長商店様にご協力いただき、プレカットでは対応できない難しい手刻みの加工や特殊金物のご相談等のもっていただきました。山長商店様は、紀州材（杉、ヒノキ）を植林から製材まで一貫して行っている和歌山の林業会社であり、厳しい品質管理のもと出荷される紀州材は、強さ、見た目の美しさを兼ね備えた和歌山の誇る特産品です。

自然素材で包まれた落ち着いた空間で、ちょっとした待ち合わせの待ち時間にコーヒーを飲んだり、季節の農家さんのフルーツや野菜の販売や雑貨の販売、各種イベント開催などを予定しております。

冬には薪ストーブで暖まる空間を是非体感しにきてください。

【企画・実施設計・施工・運営】

金沢 貴允（かなざわ たかのぶ）

1982 和歌山市出身  
近畿大学付属和歌山高校  
関西大学工学部中退  
株式会社FuKuホーム 営業・企画

【基本設計】

李 圭範（い きゅぼむ）  
1979 韓国、ソウル出身  
2010 筑波大学大学院  
建築デザイン専攻修士課程修了  
2011 株式会社直井建築設計事務所  
2015 株式会社川辺直哉建築設計事務所  
2022 一級建築士事務所heretokyo設立



内観 屋内から2本の道路を見る



利用風景（夜）



利用風景（昼）



利用風景（昼）



2つのボリュームの交差が多様な空間を生み出す



外観 2本の道路が鋭角に交わる「かど」に建つ

# 大阪・関西万博の風景



# Pavilions

西ゲートゾーン  
フューチャーライフゾーン





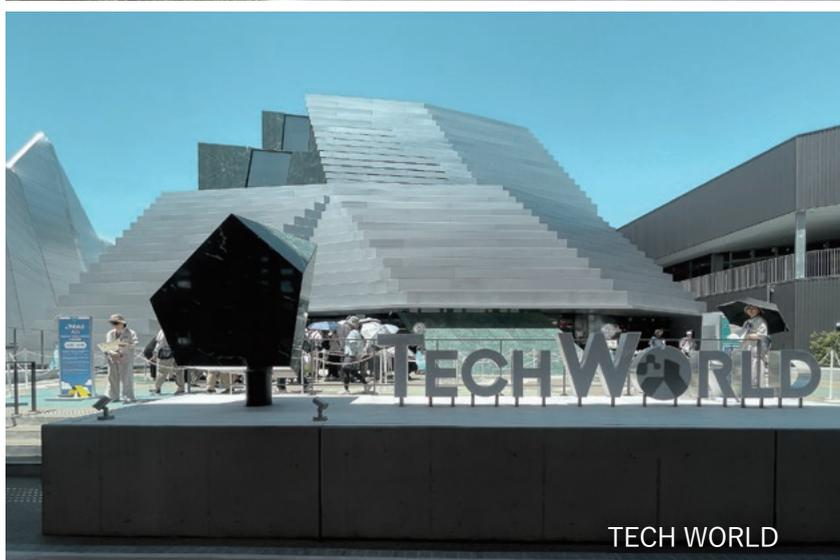
ブルーオーシャンドーム



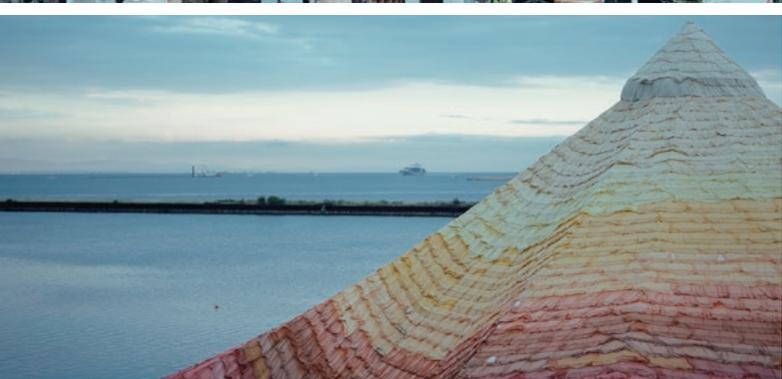
飯田グループ×大阪公立大学共同出展館

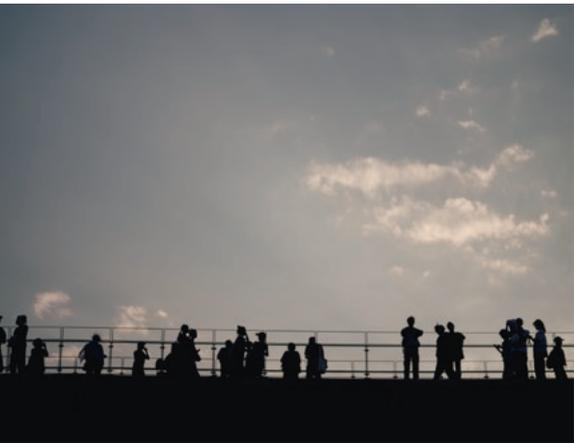


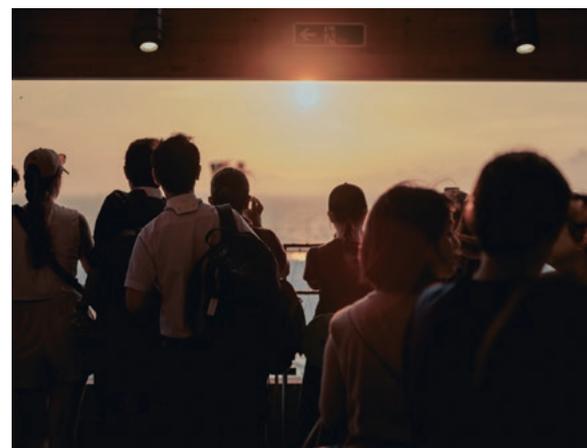
ガスパビリオンおばけワンダーランド

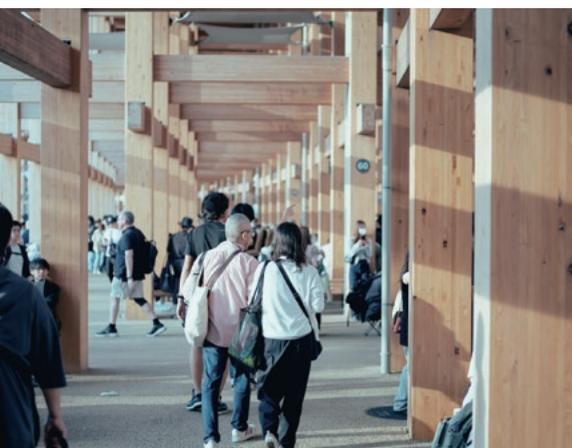
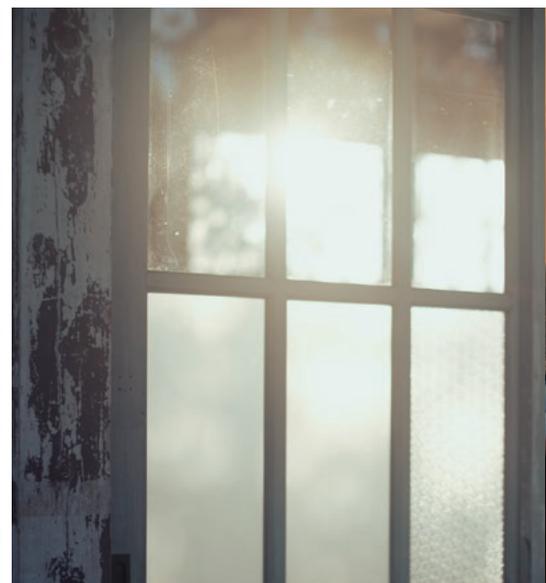
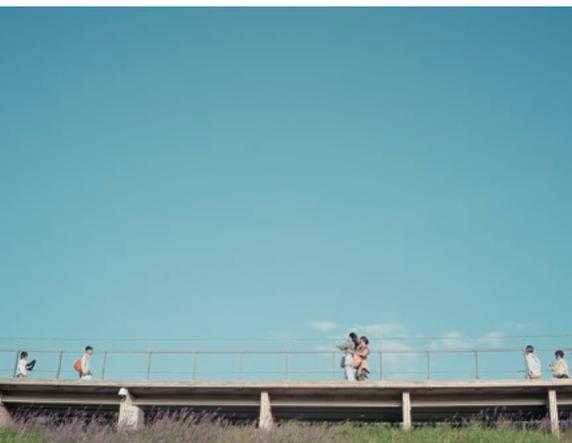
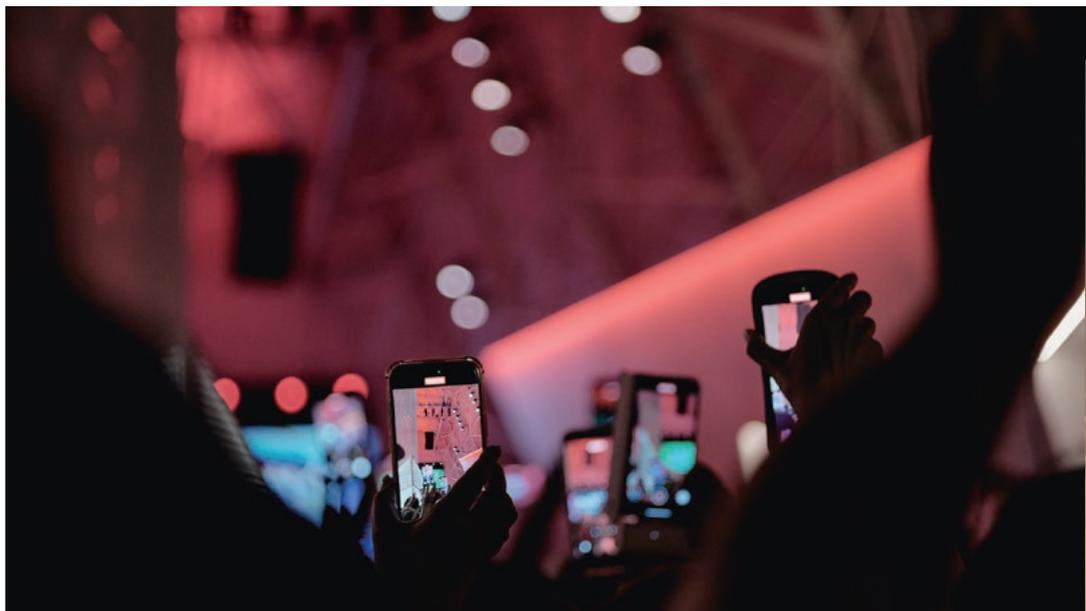
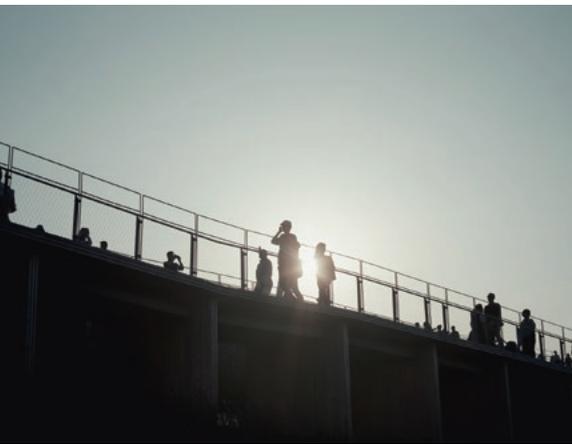
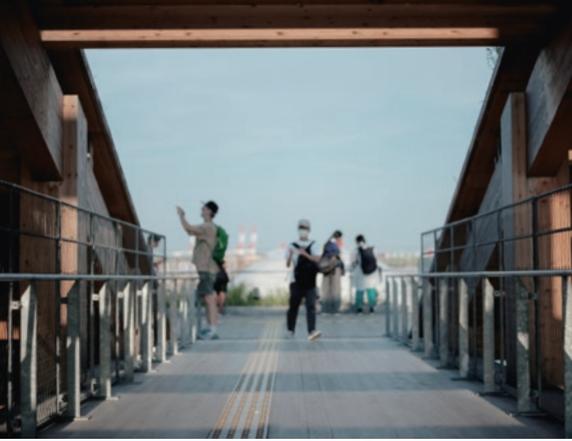


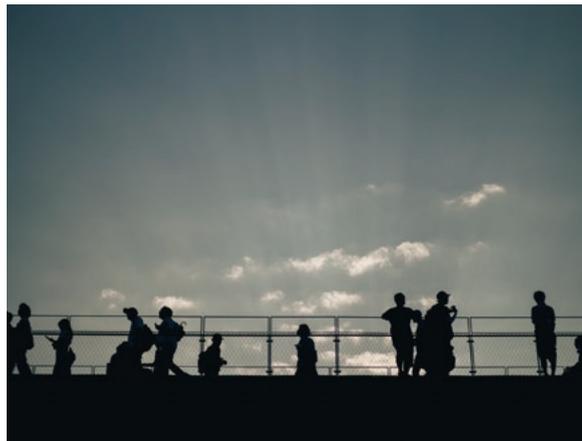
TECH WORLD











## アフター万博

# 藤本壮介氏特別インタビュー「大阪・関西万博の総括」

日時：2025年12月24日(水) 9:00 開始

場所：日本建築協会会議室 & オンライン (Teams会議)

出席者：藤本壮介 (建築家、大阪・関西万博 会場デザインプロデューサー)

参加者：指田孝太郎 (日本建築協会会長・日建設計)、吉村英祐 (日本建築協会常任理事・大阪工業大学)、  
浦山豊隆 (編集企画委員会 計画分科会・フジタ)  
柏原忠明 (日本建築協会常務理事・事務局長)



© David Vintiner

藤本壮介 (ふじもと そうすけ)

1971年北海道生まれ。

東京大学工学部建築学科卒業後、2000年藤本壮介建築設計事務所を設立。2014年フランス・モンペリエ国際設計競技最優秀賞 (ラルブル・プラン) に続き、2015、2017、2018年にもヨーロッパ各国の国際設計競技にて最優秀賞を受賞。国内では、2025年日本国際博覧会の会場デザインプロデューサーに就任。2024年には「(仮称) 国際センター 駅北地区複合施設基本設計業務委託」の基本設計者に特定。

主な作品に、ブダペストのHouse of Music (2021年)、マルホンまきあーとテラス 石巻市複合文化施設 (2021年)、白井屋ホテル (2020年)、L'Arbre Blanc (2019年)、ロンドンのサーペンタイン・ギャラリー・パビリオン2013 (2013年)、HouseNA (2011年)、武蔵野美術大学 美術館・図書館 (2010年)、House N (2008年) 等がある。



指田孝太郎 (さしだ こうたろう)

当協会会長・日建設計



吉村英祐 (よしむら ひでまさ)

当協会常任理事・大阪工業大学

## はじめに：万博特集の軌跡と総括への期待

**指田：**日本建築協会では、協会誌『建築と社会』において、2023年の1月号から万博の特集を組み始めました。まずは「万博とは一体何なのか」という根源的な問いから解きほぐし、今年の開催へと繋げてきた経緯があります。2023年1月号では「温故知新」をテーマに、都市住宅社会としての博覧会という側面や、1970年万博のレガシーである「太陽の塔」の継承といった内容を取り上げました。

続く2024年の1月号では、会場での建設が具体的に始まりつつあった時期でしたので、当時大きな話題となっていた「大屋根リング」のこと、そして藤本さんが提唱された「若手建築家20組による公衆トイレと休憩所の設計」などを特集しました。これは、他のマスメディアに先駆けて多様な試みを取り上げることで、機運醸成を図るという狙いがありました。

そして今年の1月号では開幕直前企画として、日本館、電力館、住友館といった各パビリオンについても、かなり詳しく先行して掲載させていただきました。

今回、藤本さんにインタビューをお願いした理由は、来年（2026年）の1月号あるいは2月号にかけて、万博の「総括」をしたいと考えたからです。会場デザインプロデューサーを務められた藤本さんに、これまでのメディア取材では語られていないような、内側の深いお話や裏話なども伺いできればと思っています。

## 第1章：1970年の記憶と、藤本壮介の万博初体験

**指田：**それでは、ここから順番にいろいろとお伺いしたいと思います。藤本さんは1971年のお生まれということで、1970年の大阪万博は、その前で、ご経験はされていない。実は私も、今日参加している吉村さんも万博世代。70年万博の時には、私は中学1年生、吉村さんは中学3年生。私は10回以上会場に通い、実際に太陽の塔や、大屋根をはじめとする当時最先端の建築を目の当たりにして非常に感化されました。特に私はアメリカ館のドームに感動したんですが、藤本さんが「万博」に触れた最初、あるいは万博というものがあるとお知りになったのは、何がきっかけだったのでしょうか。実際に行かれたのは、例えば前回のドバイなのか、上海なのか、また万博会場のデザインプロデューサーを務められた立場から、万博とはご自身にとってどのようなものであるのか、感想も含めて伺いできればと思います。

**藤本：**ありがとうございます。よろしく願いいたします。万博は、2005年の愛知の時には全く関わっていませんでしたし、一観客として訪れたわけでもないんですね。ですから、万博に触れた最初と言えるのは上海ですね。上海万博の時に、日本産業館という、企業が合同で出展するパビリオンがあったのですが、その取りまとめ役をされていた堺

屋太一さんに呼ばれました。

堺屋さんが直接というよりは、建築評論家の馬場璋造さん経由で、「堺屋さんがこういうの（万博）をやってるから、おもしろい若い建築家に声をかけているんです」と言うので、打ち合わせに参加しました。その時に、生の堺屋さんのパワーを拝見して、とにかくすごい人だな、と。この人が、あの1970年の大阪万博や1992年セビリア万博日本館のリーダーシップをとってやられたっていうのは聞いていたので、あ、この方かと。その姿を拝見したのが最初ですね。

上海万博の日本産業館の時は、まあ、なかなかカオスで。いろんな企業さんが参加して、いろんなデザイナーが参加して。私は結局、LIXILさん……当時のINAXとトステムが両方出展されていて、そのブースを担当した記憶があります。一度現地に行きました。上海の万博は、日帰り、その場所だけ見て帰ってきました。会場全体が大きいじゃないですか。行っただけで万博という印象はなくて、現地に行って結構なカオスだな、という印象でしたね。

その後、ミラノの時は日本館のコンペに参加して、負けました。なので、ちよくちよく端の方では関わっていたのですが、万博の全体像というのは、実は全く体験しないままだったのです。そんな状況の中で、今回の万博の会場デザインを、やってもらえないかというお話が来たのです。

## 第2章：ドバイでの体験とプロデューサー就任

**藤本：**会場デザインプロデューサーのお話をいただいたのは、2020年の春ぐらいですかね。お話が来た時、万博というものを一つも見たことがなかったな、と。それで経緯についてはあちこちで話しているのですが、プロデューサー選定の段階では万博協会の方は何も言わずにいらっちゃって。当時の会場デザイン案ですね。あれは確か日建設計さんが、豊田啓介さんのベースの案を引き取って描かれていたものでした。

**藤本：**協会の方が、「いろんな人に意見を聞いているんです」という感じでいらっちゃって。その時は結構、好き勝手なことを言っちゃってたんですよ（笑）。そういう機会が2回ぐらいあって、1回目は協会の担当スタッフの方、もう1回は石毛博行事務総長でした。「このあいだのような話をしてほしいんです」と言われて、また好き勝手に言っていたんです。その時は万博全体の会場デザインをやるようなことは、僕も想像してなかったんで、割と気楽な感じで、いろいろ言いたいことを言っていました。で、2020年の春ぐらいに会場デザインプロデューサーを、という話になったのです。

万博の一つも見たことがなかったなと、ほぼ予備知識が無かったので、まずは書籍を結構購入して勉強しました。それからドバイの万博に行っただけですが、あれは2021年ですね。1年延期されていたので、2021年の3月に行きました。その時には、すでに大阪・関西万博の計画案は

もう発表して。案を作った状態で、ドバイ万博を見に行きました。

ドバイは一人で、5日間ぐらい、とにかく缶詰状態で。なるべくたくさん、50いくつかのパビリオンを見て歩きました。2時間とか3時間とか並んだりしながら（笑）。

それは、なかなかいい経験で。やっぱり普通の一般来場者として万博を体験するってどんな感じなのかな、と思っていたので。5日間連続で行って、2時間とか並びながらパビリオンを歩くと、「ああ、こういう感じが万博なのか」と。結構おもしろく、楽しく体験したのです。

ですから、今回の万博の最初の会場デザインコンセプトを考えるとここでは、実は万博の実体験がほぼない状態で考え始めました。でも、それが結果的にはよかったのかなとも思います。先入観なく、今の時代にどういう万博が必要なのか、あるいは万博とはそもそも何なのか、というのを再定義しないことには、このプロジェクトをやる意義がないかな、と思っていたので。2020年の春から夏にかけて、自分なりに万博を俯瞰的に見て、再定義していくような作業でした。

万博を体験したことがなかったというのは、仕方なかったもので、その時から急に過去に遡るわけにはいかず、とにかくできる範囲で、万博というのを学び、想像力を膨らませながら再定義していくような仕事でしたね。

### 第3章：コロナ禍の分断と「大屋根リング」の誕生

**藤本：**実際に大きかったのは、当時の時代背景です。2020年当時、一つはコロナが始まっていた。2025年の万博開催時にはコロナが克服されている、ということを前提にしていましたけれど、そうなると、やっぱりリアルに人が集まったり、リアルに何かを見たりすることの意義は格段に高まるだろうな、と。当時は皆が会えなくて、オンライン会議ばかりで、どんどんそちらにシフトしていくんじゃないか、という時代でしたから。でも建築をやっている当事者として、いや、全部がバーチャルにはならないだろう、やっぱりリアルなものっていうのも価値は残るだろう、と思った。

もう一つは、その当時から「分断」という言葉がすごく言われていたことです。多様性を尊ぶ社会と言われながら、全部がバラバラになっていく。それが、あまりにももったいないな、という気がしたんです。そこに何かカウンターメッセージというか。力強くそうではないんだ、多様な文化や人々がつながることができるんだ、ということを訴える場としては、万博はまさにふさわしい場だと思いついたんです。

この2025年というタイミングで、世界が分断を激しくしている今、あえて万博をやる。それはすごく意義があることなんじゃないかな、というふうに考えた。最初は概念として考えて、それが大屋根リングにつながっていくわけですけど。会場のマスタープランにつながるんです

が、その考えの後にドバイを実際に見に行くと、改めて世界の多様さっていうのはほんとうにすごいなと驚かされました。自分が名前ぐらいは知っているような国でも、パビリオンの中で自然の風景だったり歴史だったり、暮らしが展示されているのを見ると、いや、本当に世界には驚くべき多様な文化と国があるんだな、というのがすごい感動的でした。これは自分が考えていたマスタープランで間違いないな、という確信を深めたというのがありました。

今思うとドバイの時は、コロナ中だったというのもありますよね。現地での盛り上がりは、関西・大阪万博と比べると、割とドライな感じだった気がします。

**指田：**ドバイは敷地も広いですよ。

**藤本：**そうそう。敷地が拡散しているんです。ドバイに行った時、今回（大阪）の敷地が狭いというのは、マスタープランを計画するときから一つの特徴だな、とっていて、狭い、というのをネガティブな意味ではなく、むしろ、いろんなものが凝縮している場として作ったら、これはいいんじゃないかな、とポジティブに捉えようとした。それで「リング」をつくった、というの意味があって。あの中にぎゅっと入っていることで、かなり密度の高いいろんな出会いやパフォーマンスが行われるだろう、と。ドバイでもパフォーマンスなどは起こってるんですけど、わりと散發的なんですよ。それは今回の大阪・関西万博の一つの魅力になったのではないかなと思います。実際にできあがって体験した万博は、本当に特別なものでした。建築をやっている皆さんも感じると思うのですが、ものを作るということと、そこに人が集まってきて、人の営みが生まれ、活動が現れるということは、やっぱり格段に違いますよね。普段の建築設計でもそうだよなって思ってるんですけど、今回、集まってくる人数の桁が格段に違うのと、ある種の高揚感を持って皆さんが集まってきてくれたので。あの「リング」にせよ、パビリオン前のパフォーマンスにせよ、通路とか広場を歩いているだけの風景にせよ、人々が作り出す風景というのは、ほんとうにとてつもないエネルギーを持っているな、と。それをもちろん最大限に生かすというか、現れる場を作っているつもりでいましたけど、その想像をはるかに超えていました。

**指田：**あの場でのリアルな体験は、他では得難いものがありましたね。当初の構想であった「ポロノイ」、「非中心、離散」というコンセプトから、多様でありながら一つ、ということで提案されたのが「リング」ですね。プロデューサーを引き受けられたのは2020年の4月ぐらいだったと思いますが。

1月頃に、コロナが大騒ぎになり始めた直後ですね。

**藤本：**そうですね。はい。

**指田：**私は森美術館の展覧会（注：「藤本壮介の建築：原初・未来・

森」・2025年7月2日～11月9日)で、「リング」のスケッチを拝見させて頂きましたが、たくさんの大きささまざまな「リング」が書かれています。あの時期に、もう数年後の分断の世界を予見していたかのような案を出された。その予見力というか、発想力がすごいなと思って。今、結果的には大正解の案だったと実感します。

**藤本**：そうですね。予見というか、当時は第一次トランプ政権下で、ほんとうに分断ということが言われ始めて、そこにコロナもあって、余計にそういう時代の雰囲気になっていたんですね。元々の案のポロノイの非中心で離散というのは、僕もコンセプトとしてはすごく共感しています。多種で多様、そのすべての場所がすべての中心であって、それが輝くってというのはすごくいいなと思ったし、僕がずっとやってきた建築もそういうところがあり、共鳴するところがありましたね。ただ、分断と言われ始めていたタイミングなので、ポロノイの持つそのバラバラ感が分断をそのまま象徴するような会場計画に見えてしまうと、ちょっと危険だな、というのがあって。それで、真逆に振っていったんです。あの時代背景がなかったら、もしかしたらその発想にはならなかったかもしれない。だから予見というよりは、本当、時代の中で皆がなんとなく感じていたこと。あと2020年東京オリンピックの時に、クリエイターに対してのすごい強い風当たりとか、SNSがネガティブに運用されてしまったというのもありました。

これは、何かをつなぎ留めないと、厳しい時代になっていくのではないかと感じ取っていましたね。その後、残念なことに世界の分断はより進んでしまった。ロシアがウクライナに侵攻したり、中東の方でいろいろ争いが顕在化して、SNSもどんどん分断を煽る方向になっていって、世界はこの5年でより分断が深く激しくなっていたのですが、だからこそ、2025年につなぎ留めて行こうというあのメッセージを発信できたのはすごくよかったのではないかと気がします。

#### 第4章：木造と貫工法の挑戦

**指田**：コンセプト案を、当時見させていただいた記憶があるのですが、とても印象的でした。それが実現できているのがすごいし、ポロノイは非常に観念的なすばらしいアイデアではあるのですが、1日20万人も訪れる施設機能面でほんとうに解けるのか、という課題はありました。そこに、ああいう大きな建造物をつくって、道標にもなり、モニュメントにもなり、結果的に日本の猛暑をやわらげる日除けにもなった。これは想定以上に効果があったのではないかと思います。

**藤本**：そうですね。大屋根リングの下は、思いのほか涼しかったです。単純に日除けに利くかなというくらいに考えていたのですが、風の抜けもあって気温自体がすいぶん変わりましたよね。確かにポロノイの案の時に一番気になったのは、どのくらい「迷いやすい」方がいいのか、と

いうことでした。迷いやすいというのはワクワクする感じがありますけど、一方で万博はすごい数の人が来るから、わかりやすさと迷いやすさのバランスがどの辺なのか、というのは、機能的な視点からすごく考えたときに、とりあえず解りやすい動線を考えていきました。

**指田**：あの敷地の大きさに対して、直径600メートル程度、あの巨大な幅、高さ。メインストリートとしての幅が重要だったと思います。一つの空を見上げるために、視線全体を上げて、会場全体を見渡せる、あの会場にあの巨大さを作ろうという決断はすごかったなと私は思っていますが、たいへんな勇気が要ったのではないですか。

**藤本**：はい。機能的なところと、理念のところ。メッセージのところといろいろ考えていく中で、実はあの大きさというのは検討の中では結構大きくなったり小さくなったりしていたのです。300mぐらいの時もありました。

**指田**：そうなんですね。

**藤本**：400mぐらいになったり。最終的には一番大きな、670mぐらいになっていったんですけど。丹下健三さんのあの70年万博の大屋根が、最初の計案で6万㎡ぐらいだったんですね。僕がリサーチで最初に見たドローイングが、幅100mぐらい、長さ600mぐらいでフットプリントが6万㎡ぐらいの面積が、万博というものの一つの規模感というところもあり、リングをこうつくろうと言った時に、運営側から「とにかく大混雑するから十分な幅をとってくれ」と言われていました。幅30mくらいというのはめっちゃめっちゃでっかいよな、と思ったのですが、それぐらいが必要だって雰囲気がありましたね。中に各国のパビリオンを全部入れるというのがコンセプトになったので、それをに入れていくと、どんどん膨らんでいくわけですよ。機能的な所を丁寧に見ながらつくっていくと、あのぐらいの大きさになっていって。それが、丹下さんの屋根の当初の構想と同じぐらいのサイズだったというのもおもしろいな、と。やっぱりあり得ないぐらいのものが現れる、岡本太郎さんの太陽の塔のような高揚感というのも必要だろうと考えました。

ただ、僕もそんな巨大な建造物を体験したことがなかったので。なかなか想像が難しかったですね。結構いろんな方に説明に行った時に、首都高速道路みたいな、寄り付きがたいようなものになっちゃうと嫌だよな、っていうのはすごく言われていて。

確かに一歩間違えると、首都高速道路の下にいるみたいになってしまったら、これは良くないよなと考えて、そこで以前からSustainability、持続可能性の視点から木造でやるべきだろうなと思っていました。木造でつくったことによって、ヒューマンスケールになり、首都高速道路のようなアウトスケールにならないものに着地できたんだろな、という気がします。

**指田**：当初から、木造には特にこだわられていたのですか。伝統的構法

であるとか、リサイクルリユースを前提に。結果的に貫構造は、一般の方々にもわかりやすく大正解だったと思うのですが。

**藤本**：はい。最初の構想の時から、木造でやるべきだろうな、と思っていました。協会にも、「なぜなら今、世界の潮流は大型木造なんですよ」と説明をして。でも一方で、本当に木造でやれるの？というの、僕も含めて皆、懐疑的で。日建設計に試算してもらった時、最初は鉄骨で、350億という試算が出てきました。会場全体の建設費が1,850億円という規模です。2020年のクリスマスの頃に計画が発表された時には、実はまだ木造とは言ってなかったのです。協会からは「やれるかどうかわからないから、今回そこは言わないでくれ」と。それで試算された鉄骨の350億円をターゲットにして、そこに収まるなら木造でやろう、とリサーチをしまして、2021年から半年以上かけて、どうもなんとかかなりそうだとわかってきたので、プロポーザルを実施しました。木造でやらないといけないとは書いてないのですが、木造をかなり推奨するようなプロポーザルで、リユース、リサイクルは当然という話で。僕の中でも、木造でやるべきだなと思っていましたが、どういう木造かというのはあまり最初解ってなくて、そこで東畑建築事務所があつた柱と梁を提案してくれました。プロポーザルの時は、実は「貫」はなかったのですが、やっぱり日本の伝統とも共鳴する垂直水平というのはありだよな、と。また、つくりやすそうだということもありました。基本設計に僕も入って一緒にやる中で、「貫」にするとよりハードルが上がるのですが、普通にプレートを入れて、ドリフトピンで留めるっていうのが工法としてはありますけど、せつかくの万博だし、チャレンジをすることと、日本の伝統によりダイレクトにつながる方がふさわしいということで。それで「貫」の方法が生まれてきて、結果的には大成功だった気がします。

## 第5章：若手建築家への期待と、建築の本質

**指田**：さて、もう一つお伺いしたいのが、今回、若い建築家に活躍の場を与えられたことです。やはり、あのような、世界中から人が集まる中で、なかなか自己実現の機会がない若手建築家に、トイレではあるけれども、個性あるものをいろいろ提案するように仕組みられた思いをお話してください。コストについて、世間ではいろいろいわれましたね。私たちからすると、それぐらいコストがかかるものと思いますが、なかなか一般の方にとっては想像しにくい金額で、パッシングを受けながらも、若い建築家が自ら発信して理解を求めた。藤本さんもリングを始め、猛烈な批判を受けながら、すごい精神力で跳ね返して、なんとか乗り切ったわけですけど、若い建築家たちに向けての思いがあれば、お伺いしたいです。

**藤本**：ええ。2020年当時、私は49歳で、今は54歳なんですけど、もはや若手ではなく中堅になりつつあるな、と。若い時はなんだかんだ、伊

東豊雄さんとか妹島和世さんとか、あと今回の万博でも安藤忠雄さんとか、上の世代の方にいろいろな場所に連れて行っていただいたり、若い世代でこいつがおもしろいと推薦していただいたりしました。そういうのが脈々と続いているんですね。磯崎新さんが安藤さんや伊東さんをニューヨークの国際会議に連れて行ったり。その元をたどると、丹下さんが70年の万博で磯崎新さん、黒川紀章さん、原広司さんなど、若い建築家たちと一緒に取り組みました。そういうのが日本の建築に何世代にもわたり、広さと深さを作っていると実感するところがあって、55年ぶりの万博なので、新しいパビリオンなどの建築をたくさんつくるのであれば、70年の時に丹下さんが、プロデューサーとしてやられていた、若い建築家を活躍させるというのが、これからの日本の建築界、日本の社会にとってすごい意味を持つのではないかな、と。実際に磯崎さんや黒川さんとか、その他の多くの方々が日本の建築界を牽引していったわけですよ。だから、実現できたらおもしろいと思いついたんです。

協会が結構、プロデューサーの意向やプロデューサーのビジョンを、クリエイターとして尊重してくれてるなどというのは、一年ぐらいやりとりをして、すごく感じたところで、若手建築家をこう盛り上げたいという話をしたら、頑張ってくれました。

それで、最初は協会からは「6個ぐらい」と言われていた施設数を、いろいろやり取りして20個に増やしてもらいました。プロデューサーとしての権限を行使してもいいんじゃないかな、と思って（笑）。

パビリオンってやっぱりコンテンツの話もあるし、最近は映像表現が多かったりして、ブラックボックス化しがちですよ。それに対してトイレとか休憩施設というのは、来場者が日常的に使う場所なので、ある意味では建築的で、社会とよりつながっている。人の生活のすごい本質にもつながる、おもしろい建築プログラムであると思っています。それで、規模が手ごろだし、会場内に点在するので、かなりたくさんの方々の若手建築家を同時に登用するという意味では、ふさわしいプログラムではないかと思ってやったのです。結果的には、僕はすごくよかったなと思っています。一時期は、若手建築家を万博反対の嵐の中に無理やり引き込んだんじゃないかな、と申し訳ない気持ちもありましたが、想像以上に彼らがたくましくて。単につくりたいものをつくるのではなくて、社会とコミュニケーションをとって建築の意義を伝えるかというのを頑張ってくれて、それは僕自身も彼らからの学びになりました。僕は、どうこう口を出すというよりは、彼らが考えてやるべきだと思った事を、後押しするという事に徹していたので、それはおもしろかったですね。どうしても難しい局面になったときに、協会と調整してとにかくバックアップをする形でやりましたね。

今回活躍した若手が、例えば十年後とか中堅以上になった時に、さらにその下の世代をこう応援したり、サポートしたりっていう伝統をまた

受け継いでほしいな、というのがあります。

**指田：**東京都の公共トイレのプロジェクト「THE TOKYO TOILET」がきっかけで、映画になったりして広く認知されましたけど、今回、一般の方々が「石のトイレ」とか、個性の強いデザインに関心を持ってくれたのはよかったですね。20個の個性的なトイレや休憩所についてですが、それらを会場内に配置する際の手法について伺います。プロデューサーとして、「ここは石を使う、ここは木を使う」といった素材の指定や、デザインを見てから「石の案ならこちらの場所の方がいい」というような、全体を俯瞰した組み替えやアレンジはなされたのでしょうか。あるいは、当初から特定の場所を指定して設計を依頼されたのですか。

**藤本：**いえ、私の方で場所を細かく指定したり、組み替えをしたりといったことは特にしていません。というのも、最初のプロポーザルの段階で、20箇所それぞれの場所を固定して募集するとなると、審査が非常に煩雑で大変なことになってしまいます。ですので、まずは「トイレならここ、休憩所ならここ」というように、特定の候補箇所に対してアイデアを出してもらおう形をとりました。つまり、最初は全員が同じ場所を想定して提案している状態でした。

**指田：**なるほど、まずは共通の場所でアイデアを募ったのですね。

**藤本：**そうです。そこから一箇所ずつ選んでいくわけですが、審査員で議論しながら「このアイデアであれば、あちらの場所でも活きるのではないか」というように、提案されたアイデアの特性を考えながら、ざっと配置を割り振っていきました。あくまでアイデアの内容を優先して、適したロケーションを考えていったわけです。

**指田：**ロケーションが決まった後に、設計者側で変更などはあったのでしょうか。

**藤本：**ロケーションが決まった後で、その場所に合わせてアイデアを調整していった方もいましたね。また、コストの問題なども含めて、自分で考えを深めてアイデアを自ら変えていった人もいます。私としては、そうした変化も含めて「どんどんやってください」というスタンスでした。「会場全体の中で、こういうものをここに置きたいからこうした方がいいな」というように、私の方から無理に押し付けるようなことはしませんでした。

**指田：**若手建築家たちの個性的なアイデアを尊重し、プロデューサーとして「押さえつけない」という姿勢を貫かれたプロセスを深く理解できました。さて、最後にやはり万博の「レガシー」について伺いたいと思います。

## 第6章：万博の「レガシー」について

**指田：**私個人としては、建築的な遺産というハードの継承も一つの形ですが、それ以上に、現地でのリアルな体験を通じて得た感動を心に留め

ておくこと、そしてその記憶が体験した人自身のその後の成長や社会活動にどう繋がっていくかという点こそが、本質的なレガシーではないかと考えています。

世間ではどうしても、レガシーを1970年万博の「太陽の塔」のような象徴的な建造物と比較しがちです。藤本さんご自身、大阪・関西万博が遺すべきレガシーについて、改めてどのようにお考えでしょうか。

**藤本：**ありがとうございます。一番大きなレガシーというのは、やはり来場された方、あれを実体験された方々の中に残るものだと思います。建築物だけではなくて、あの場の雰囲気だったり、全体を体験した人が何かワクワクしたり、勇気をもらえたり、この先の社会をつかっていく上での何かを得たというのが、やっぱり一番大きいんじゃないかなと思いますね。

1970年の万博でも、あの日あの会場で見た光景によって人生が変わったという風におっしゃる方が今も本当に多いじゃないですか。今回も多くの子供たち、若い人たちが来場してくれました。彼らが20年後、30年後にどういう形で活動していくのかというところに、それこそがまさにレガシー、一番のレガシーは「人」ですよね。あそこを体験した人が作り出すこれからの社会と未来が、一番大きなレガシーだなと。

## 第7章：都市の記憶を留める仕組みと、保存を巡る「マインドのシフト」

**藤本：**一方で、建築、「リング」に関してはなかなか難しく、あれだけ巨大なので、残せれば一番いいだろうなどは僕も思っていますが、ただ現実的な問題がいろいろあり、あとは、建物を残すということに対して、ヨーロッパほど思いをかける文化は、日本にはまだないですね。日本は災害が多かったりして、昔のものが火災とか地震で壊れてしまったりするので。伊勢神宮の様なつくり変えていく文化がありますが。でも持続可能な社会とか、都市が持っている記憶をずっと留めておくような役割も、僕はやはりあるような気がして。その時に、ものをただ壊して建て直すという文化だと、ちょっともったいないと思っています。多分ここからさらに数十年、百年以上かけて、日本の文化がどう変わっていくのかという問題になってくるかなと。建物というのは、つくるのが大変で、壊すと一切なくなってしまうので、本当にもったいないなという気がしています。

あとは、行政側と民間側がもっと連携しながら街をつかっていくこと。今回の万博もそうですし、跡地利用なんかもしていけるような仕組みができると、もう少し積極的な将来ビジョンみたいなものを当初から作っていったり、あるいは土地開発にしても、クリエイティブにものを作っていけるのではないかと。これは縦割りの文化や、役所と民間の違いなんかもあるので、そのあたりももう少しずつ変わっていくと、将来

的にはおもしろいのではないかなという気がしますね。

**指田**：あるメディアで藤本さんは、残してくれるのはありがたいけれども、中途半端に残るのもちょっと、とおっしゃっています。たとえ200mといった一部であったとしても、残ることについてはどうお考えですか。

**藤本**：そうですね。ただ、ちゃんと丁寧に維持管理していかないと、ボロボロになって残るのは忍びないですよ。難しいのは今、大阪市の方で残すということで、そうすると税金がかかってくるじゃないですか。本来であれば、しっかりあそこからどうお金を生むかというところを考えて、そこから維持のお金を生み出していくというふうにしないと、なかなか持続していかないですよ。

古い建物が全部そういう課題に直面していると思うのですが、どうそれが運用され、お金を生んで、維持費を生み出して、人々のための価値を生み出し続けていくのかというマインドの作り方、シフトの仕方っていうのは、これからすごく問われてきますよね。

## 第8章：大屋根リングの体験と記憶を残す

**指田**：そうですね。記憶を留めるという課題に関連して、今、参加されている大阪工業大学客員教授の吉村さんですが、実は独自に検討されている案\*があります。吉村さん、説明をお願いします。

**吉村**：ご紹介ありがとうございます。私は「残せないものを残す」ことが大事であり、そのハードルを乗り越えることが建築に携わる者としての一つの大きな役割だと考えています。私は、残せないと言われていた太陽の塔が残り、ついには重要文化財になったように、大屋根リングもなんとか残せないかという思いです。私もかつて設計の実務に携わっていましたので、全残しがさすがに無理だということは分かっています。

かといって、その1/10だけを残したとしても、残りの土地がレジャー施設や商業施設などで埋まってしまうと、万博の理念を伝える地にならないように思います。太陽の塔は、あの周りが芝生広場で残されているからこそ意味があるんですよ。そこで、全残しか部分残しかという二項対立に対し、第一案として考えたのが、柱を正方形断面の一边と同じ42cmの高さで切断し、遺構として残す案です。

**藤本**：42cmという高さですね。

**吉村**：はい。42cmは人が腰掛けるのにちょうど良い、ベンチの高さです。あえて巨大な上部構造を残すのではなく、柱を「切り株」のような立方体として残すのです。これならば基礎は全部残りますから、莫大な費用を要する基礎の撤去工事費用が大幅に削減できます。

残された柱の整備費用は、寄付で賄います。ベンチの座面は保護し、夜間に光る仕掛けを施します。光る仕組みは、所沢市にあるイルミネーションマンホールが参考になります。より安価な方法として、蓄光材を使用することも可能です。残す大屋根リングの上から見下ろすと、柱の

基部の列がかつての大屋根の位置や大きさを伝え、夜間には幾重もの光のリングが浮かび上がります。ベンチの列に沿って歩くことで大屋根を巡る追体験ができ、その風景がSNSを通して世界中に発信されれば、人気のスポットになる可能性が高まります。また、地図やGoogle Earthにも大屋根リングの痕跡が浮かび上がり、ここが大阪・関西万博の開催地であったことを後世に伝えていくことができます。

この案を考えるきっかけとなったのは、毎日新聞（2024年11月19日）のインタビューで、藤本さんが「万博がこの地であったという記憶が、太陽の塔のように脈々と受け継がれるのがよいと思います」と言われていたことに強く触発されたことでした。

**藤本**：ありがとうございます。僕も、もの自体を残すということと、足元だけを昔の遺跡みたくに残すというのはありかな、と。一方で、そこをどちらが管理するのか。民間が管理するのか、あるいは府市が管理するのかで、ずいぶん意味合いが変わってくるような気がしています。足元だけを残すと公園のような場所になっていくわけですけど、そうするとお金をなかなか生まないわけですよ、その部分は。で、跡地開発をする事業者が、そこを大きな公園として都市開発してくれるのか。結構な面積エリアなので、そこに建物が建たないということのデメリットがどうあるのかは、ちょっと丁寧にやっつけていかないといけない気がしますよね。

**吉村**：パークPFI（公募設置管理制度）のような仕組みを導入し、魅力のある収益施設を誘致して、多くの人々が訪れる場所として再生させていく。そうした官民の連携が重要になりますね。

**指田**：藤本さん、本日はお忙しい中、貴重なお時間を頂戴しありがとうございました。

会場デザインの根底にある思想から、貫構造への挑戦、そして20組の若手建築家を起用された意図まで、密度の高いお話を伺うことができました。私自身、70年万博で建築の力を目の当たりにした一人ですが、大阪・関西万博を体験した若い人たちがつくり出すこれからの社会と未来に期待したいと思います。

また、最後にお話しいただいたレガシーのあり方や、柱の基部を残すという吉村さんの提案は、これからの都市計画や建築の保存を考える上で重要な視点だと感じました。

今回伺った貴重なお話は、我々の会誌『建築と社会』の総括特集としてまとめ、しっかり記録に残させていただきます。本日は本当にありがとうございました。

**藤本**：ありがとうございます。またどうぞ引き続きよろしく願いいたします。

以上

\*具体的な提案内容は、吉村英祐：大屋根リング「一部残し+α」の提案（建築と社会 2026年1月号）を参照。

# アフター万博6社共催イベント 組織設計事務所とゼネコン設計部から語る 「万博から生まれた可能性とこれからのまち・建築について」

大阪・関西万博の建築プロジェクトに携わった組織設計事務所やゼネコン設計部の担当者が集まり、その経験と知見を共有するパネルディスカッション。開催前のネガティブな世評を乗り越え、成功裏に終わった万博の成功要因や課題を言語化し、業界全体の学びとすることを目的とした。

議論の中心となったのは、①サーキュラー建築とリユースの実践、②建築とランドスケープ、展示コンテンツの融合、③デジタル技術の活用、そして④協働・共創のあり方であった。大屋根リングにおける木造技術の民主化やサーキュラー建築の実践、各パビリオンでの循環型システムの導入、3Dデータを活用した革新的な施工プロセスなどが紹介された。

また、個々の建築だけでなく、ランドスケープがもたらす「空気感」や、人と人とのリアルな交流がもたらす「祝祭性」の重要性が強調された。複雑なプロジェクトを成功に導く「指揮者」の役割や、設計・施工・発注といった分断されがちな業務を繋ぐ「共創」の工夫も議論され、万博が未来の建築と都市デザインのあり方を探る貴重な「実験場」であったと結論付けられた。

## ■登壇者〈担当プロジェクト〉

大林組／伊藤 翔〈大屋根リング〉  
日建設計／岩田友紀〈全体ランドスケープ／静けさの森〉  
安井建築設計事務所／仁賀亮太〈フランスパビリオン〉  
東畑建築事務所／平野耐仁〈大阪ヘルスケアパビリオン〉  
NTTファシリティーズ／畠山文聡〈NTTパビリオン〉  
竹中工務店／山崎篤史〈森になる建築〉  
日建設計／高橋恵多〈日本館〉

## ■コメンテーター

建築史家・大阪公立大学教授／倉方俊輔

## ■モデレーター・司会

日建設計／喜多主税・金子公亮

## ■開催日

2025年11月27日（水） 18：00～20：30

## ■開催場所

日建設計 大阪オフィス 5F

## ■主催（五十音順）

NTTファシリティーズ・大林組・竹中工務店・  
東畑建築事務所・日建設計（幹事）・安井建築設計事務所

## ■協力 日本建築協会



# 第1部：担当パビリオン解説

## ■会期後の大屋根リングの使命

伊藤翔〈大屋根リング〉

来場者に記憶に残る体験を与えた大屋根リングだが、会期中で使命・役割を終えたわけではない。

デジタル体験にはない、木造の大屋根リングで感じた居心地の良さやリアルな空間体験は、日本人が本来持っていた自然への感受性を呼び起こすきっかけになってほしい。また、世代や人種を超えて世界と再び「つながる」体験は、分断が進む時代を変える原動力になると信じている。

職人不足・労働時間制限・資材高騰・資源枯渇などによって、つくりたくても建築がつかれない時代に、つくり方からデザインすることで「世界最大の木造建築」を実現した経験は、中大規模木造の推進につなげていかなければならない。また、解体しやすくデザインされた「世界最大の循環型建築」である大屋根リングを、どうリユースするかを多くの人が考え、試すことで、愛着を持って建築材料を使い続ける楽しさを感じ、サーキュラーデザインが当たり前になる足がかりになるよう、設計者として発信を続けていきたい。

会期前の拒否反応を、会期中に共感に変えた大屋根リングだが、会期後の社会を変える影響力を持った建築とするためにも、「万博から生まれた可能性とこれからのまち・建築について」議論を続けていくことは非常に重要ではないか。



## ■レガシーとなる風景の創出

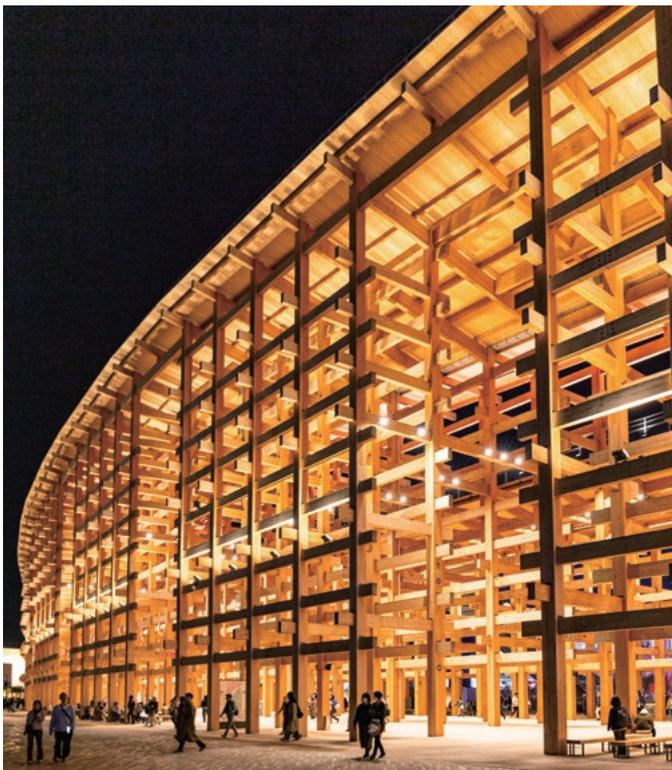
岩田友紀〈全体ランドスケープ／静けさの森〉

万博会場では多様な建築やアート作品、イベントなどがひしめく中で、ランドスケープデザインはそれらを受け止めるプラットフォームとしての役割が与えられていると考えられる。日本ならではの自然観を表すデザインとして会場全体を島並の風景に見立て、ランドスケープに落とし込んだ。リングの上から見下ろすと海に見立てた舗装の中に島々に見立てた植栽帯が連なる様子を見ることができる。



会場の中央に位置する「静けさの森」では1970年万博跡地である万博記念公園をはじめ、大阪府内緑地の伐採予定樹木を活用することで、既存緑地と静けさの森双方の緑地環境が改善し、それぞれの森が成長していくことを目指した。樹木の配置においては自然の森で見られる位置関係や、樹木による影の量を最大化する条件等、複数の条件を掛け合わせコンピューターシミュレーションにより樹木を配置するデジタルデザインに挑戦している。

設計から施工・維持管理までの過程を含め、万博で取り組んだ技術自体が次世代へつなげる「レガシー」となることを目指し、持続可能なランドスケープの新たなモデルの構築に取り組むことができたと感じている。万博会場の風景とともに会場に流れていた新たな未来が想像されていく空気感が人々の記憶に刻まれていることを願う。



## ■人々を魅了するサボワフェール

仁賀亮太〈フランスパビリオン〉

安井建築設計事務所はローカルアーキテクトとしてのフランスパビリオン（海外パビリオン）の設計・監理に従事した。フランスパビリオンは海外パビリオンの中でも最大規模を誇る。また東ゲートから入り、大屋根リングを抜けた正面に見える場所であり、視認性・集客性・来訪者を魅了する場



所性を最大限に引き出す計画を目指した。そこで「フランスのサボワフェールを引き出す舞台」としてのテーマをかかげ、外観はベールに包まれた神秘的な外装とし、舞台の幕が上がる時の高揚感あるファサードとなった。日本のサボワフェールの取り組みとして、日本国内の職人の手を借りてベールは外部利用可能な柔らかな布を国内で縫製し、風で揺らぎ光を柔らかく通しフランスパビリオンが目指すテーマを実現した。また内部展示は様々なデザイナー・アーティスト・設計者により構築され、日本の「赤い糸伝説」になぞらえ、日本とフランスが赤い糸でつながり来訪者に愛を感じてもらおう展示となった。またメディアでも取り上げられた施工者が見つからないという課題に直面したが、短期施工を実現するために施工図は3次元データをフル活用し、制作まで行なった。また多くの関係者をかき集め、現地調整などライブ感のある施工が進められた。万博の成功という一つの目的に全員が同じ方向を向けたからこそ、共創がうまく進められ、その一旦を担えた事を嬉しく誇りに思う。



## ■水・光・木が循環する建築

平野耐仁〈大阪ヘルスケアパビリオン〉

建築が、人と自然を隔てる存在ではなく、むしろつなぐ存在であってほしい。万博という国際的な交流の舞台で、開催都市である大阪の歴史と文化を改めて発信すること、そして自然と技術が融合した建築の姿を示すこと。この2つを試みた。



海と川に恵まれ、全国から木材が集まり発展してきた「水都大阪」。その歴史に加え、多様な個性が集まり影響し合い発展してきた大阪らしさを屋根で表現し、「多様な屋根のもと、水・光・木が循環する建築」とした。透明な屋根の上を水が流れて循環し、揺らめく水を通して射す光はエネルギーへと変換され、内外装の大阪府内産材は地域に根ざした木の循環を促す。平面は複数の楕円が有機的に重なる構成とし、ひとつつながりの回遊動線で結ぶことで、すべての来館者が同じルートを等しく体験できるインクルーシブな建築の姿も示した。

会期中に会場全体を満たしていたポジティブな空気感は、「未来社会の実験場=未完」という万博の前提を、参加者全員が受け入れ、補う余白を見だし、当事者としてコミットできたためであろう。そしてその空気感は、SNSによってさらに増幅され共有された。そう考えると、一見時代遅れにも見えた万博は、これからもフォーマットを保ちながら新たな技術革新を取り込んで変容し続け、常に最先端の場であり続けるのかもしれない。

万博には、これからのまちや建築につながる多く示唆があったが、あの寛容さや関与できる余白もそのひとつであった。

## ■感情を纏う建築

畠山文聡 (NTTパビリオン)

NTTパビリオンは、自分と他者、人間と自然、リアルとデジタルなど、あらゆる二項対立をなくし、多種同在的思想を、建築空間を通じて表現することをめざした。

人・自然・デジタルのふるまいが粒子化され、ボーダレスに溶け合う世界を示した。建築は分棟配置され、風や光が駆け抜ける。構造

は9mmのカーボンファイバーワイヤーによって構成され、外部に糸が集合したような柔らかな空間が表出する。古来より人と環境のあいだに衣服が介在してきたように、建築に衣服(銀布)をまとわせることで自然の機微を可視化した。建築と布の間には誰もが体験できる公園のような開かれた中間領域が生み出され、壁面側には30色の生分解性を有する色布を配置し、多様な感情を表現した。来館した子どもたちの体験や感動を色に置き換え布を結びつけていくことで、パビリオンは会期を通して変容し続ける。会期後には自然に還る循環性も意識した。人が糸に触れると振動センサーが反応し、風で揺れる布は画像解析される。展示内部で生まれた感動は、デジタル処理によって遠隔解析され、再び布全体に息づく。キネティックに振幅させることで、壁を越えた拡張性を表現した。これらの多様なふるまいは、各々の音に変換され響き合い、空間と体験が混ざり合うことで、パビリオン全体が感情を纏う建築=新たな生命体のように蠢く。多様でありひとつである。ひとつであり多様である—そのあり方を探った。



## ■朽ちる建築がのこすもの

山崎篤史 (森になる建築)

建築の「終わり」について考えたい。たった半年でごみになる建築ではなく、自然に還り、やがて森になる建築をつくる。そんな想いに共感してくれたたくさんの人が集まり、小さな休憩所としてこの建築は万博会場で実現した。

日本の古い民家や動物の巣は、地球の循環の中に組み込まれている。

このあたりまえの営みを「未来社会の実験場」たる万博の場で、両極端な工法の組み合わせ、体現しようと考えた。構造体は生分解する木材由来の樹脂を採用し、現地で3Dプリントすることで単一素材で成立させた。一方、外装材は誰もが手渡せる手漉き和紙を採用し、そこに植物の種を漉きこみ、みんなで手間暇かけて手貼りした。そして、金継ぎのようにものを大切に手入れすることで長持ちさせる日本の伝統文化に習い、新しい技術でしか出来ない建築に人が関わることの喜びを加えた。紙は構造体を紫外線から守る役割があるものの、それ自体がとても弱い素材のため頻繁な手入れが欠かせない。4月の開幕以降、和紙から芽吹いた植物が育つとともに、紙は徐々に破れ、ほころび、やがて昆虫や鳥が集まるようになった。自然に還ろうとするのをなんとか引き止め、万博会期中に“建築”でありつづけてもらうための手入れが閉幕まで続いた。

時間と共に劣化して捨てられる建築ではなく、人の愛着と時間が建築を育て、最後は惜しまれながら朽ちていく。そんな建築を万博でこそ実現したかった。



## ■循環を巡る木のモノリス

高橋恵多〈日本館〉

映像展示をはじめとするデジタルコンテンツが展示の主流となっている近年、パビリオン建築は展示領域を侵さないホワイトキューブとすることが求められ、表層的なパッケージデザインに陥ってしまっているのが一般的である。日本館では“循環”のテーマに基づき、建物としてのいのちの循環を体験すると共に、自然光やそれと共に表情を変えるCLT、隙間から垣間見える外部、明暗、気積の大小などさまざまな“展示環境”に身を置くことで、展示を実体験として五感で感じることができるパビリオンを目指した。

会期後に解体される仮設建築であることから、解体の容易さを考慮し、床も含めた建物全体で乾式工法を徹底した。CLTが立ち並ぶさまを純粋に表現することを狙い、水平力を負担するCLTと鉄骨とのハイブリッドな構成とした。後利用を考慮し、可能な限り大判で整形な材を用い、ビスやボルトによる乾式接合によって木のモノリスのようなパビリオンとなった。

半年間の役目を終え、解体が始まりCLTは後利用される。次代に受け渡される循環の物語こそが日本館である。



倉方俊輔

## 第2部：ディスカッション—万博から得られた洞察と未来への提言

### ●「単線的でない」面白さと仕事の仕方の実験

倉方氏は、海外館の多くがコンセプトをかたちにする単線的なアプローチだったのに対し、日本のパビリオンは、作り方や循環性、利用後まで考慮した多層的な面白さを持つと評価。建築と展示（中と外）が分断されがちな状況に対し、意図的に両チームを兼任するメンバーを置く（日本館）など、業務を繋ぐ「仕事の仕方の実験」が行われていた点を指摘した。

### ●「リアルの復権」と「指揮者」の重要性

デジタルコンテンツが溢れる中で、生のパフォーマンスや人間同士の直接的なコミュニケーションが強い感動と記憶を残す「リアルの復権」が再確認された。また、複雑なプロジェクトを成功に導くためには、全体を統括しビジョンを貫く「指揮者」の役割が極めて重要であることが複数の登壇者から語られた。

### ●「心地よさ」を設計できるコンピューターシミュレーション技術の進化

「リアルの復権」の一方、デジタル社会を新たな生命体としたリアルとの統合も図られた。70年万博との違いとしてコンピューターシミュレーション技術の進化が挙げられ、人流や環境を緻密に計算し、「心地よさ」という感覚的な体験を設計し、かたちの根拠が示せることが可能になった点が強調された。

### ●「不完全さへの参加」と祝祭性

万博が「未来社会の実験場」として、来場者が未完成な部分を許容し、消費者ではなく主体的に関わる（コミットできる）ことで深い思い出や愛着が生まれる可能性が示された（つじさんの地図など）。この祭りのような「祝祭性」や「だらかさ」を日常の建築プロジェクトにも取り入れることが、建築界の発展に繋がるという意見が出された。

## ■総括—共創のプラットフォームとして

最後に、万博の経験を通じて得られた学びが共有された。

●リユースとサーキュラーエコノミーの課題：リユースは重要なテーマだったが、解体後のシナリオまで設計に組み込む難しさも露呈した。しかし、この経験がサーキュラー建築を社会に実装するきっかけ

となることが期待されるため、解体されている現状をこそ我々は直に視るべきという指摘がなされた。

●ランドスケープの新たな役割：建築単体でなく、ランドスケープが空間全体の体験価値を大きく左右することが示され、ランドスケープも建築も、多様な価値観の共存を可能にする「寛容な仕組み」をデザインに組み込むことの重要性が指摘された。

●「共創」の価値：専門家が立場を超えて協働する「共創」が、より良い建築を生むために不可欠であることが、万博という実験場を通じて明らかになった（大屋根リングなど）。特にサーキュラーのような新しい分野では、競創の前に知識を共有する「共創」が重要だとされた。

本ディスカッションは、万博という一大プロジェクトを多角的に振り返り、その成功と課題を言語化する貴重な機会となった。そして、その学びを未来の建築・都市デザインに活かすため、業界の垣根を越えた「共創」のプラットフォームの重要性を再確認する形で締めくくられた。

■参加人数 対面：100名、Web：400名 ■

文責：各設計者+喜多主税（日建設計）／全体

## Our impressions after visiting the World Expo

■EXPO2025 大阪・関西万博 を視察した考察



モニュメントではなく、  
概念として残すべきフェーズに  
変わっているのではないか。

大屋根リングからの景観って？  
⇒パビリオンをただ見下ろすだけなので良くない  
V.S.  
⇒高さ以外無秩序なパビリオンをリングがまとめる安心感

3Dスキャンして  
見返すことができ  
ると面白いかも。

大屋根リングは、円周方向に回遊を  
生むフィルターであり、放射方向に  
リングの内外に体験を展開するフィルター  
となっていた。会場の主動線の  
面積を2倍にし、線ではなく活動を  
受け止める面として定義された点も  
秀逸であった。

仮設建築物が万博というお祭りの中に  
留まるのではなく、調達・設計・運用・解体  
までのスキームの中で3R+Reconstruction  
の4Rで語れるように循環のプラット  
フォームの構築が必要だ。

万博入場者数が多かった要因として、  
現代人は退屈・暇を恐れているのでは？  
上質な非日常に飢えているのでは？  
⇒AIが発達しても上質な非日常には  
つながらない？

パビリオンの展示が多様。  
全部が同じになると面白くない。  
正解が無いのが面白い。

SDGsの枠組みは万博では反映されていないのでは。  
本気で取り組もうとしていないのでは。  
⇒SDGsに対して、どれだけ本気で取り組む必要がある？

写真撮影：楠瀬友将

万博が折り返しを迎えた2024年9月9日、2040委員会有志で万博の視察を行った。参加メンバーには、大阪パビリオンやノモの国（パナソニックパビリオン）設計者もあり、設計の裏側などを聞きながら、2040委員会のテーマである「2040」について考えた。皆さんも大阪・関西万博を振り返って、未来に思いを馳せてみてはいかがでしょうか？

240

多様なパビリオンがある様が、世界の多様性を表現しているように見えた。その多様なパビリオンも、リングにまとめられることで、バラバラにならず一体感を感じることができた。今後、多様性が重要視される社会で、リングのようなまとまりを感じさせてくれる存在は一体何だろうか？

万博に行って感じたものは五感に訴えるものが多い。その中で多様性を感じるというのが、アナログではあるが、デジタルとの差がある。

パビリオンによっては開催後も展示などを更新し、常に最善な状態を模索していた。建築も『竣工＝PJ終了』と考えず、常に最善を求める姿勢や対応も必要ではないか

そこで感じないと分からないのものもある。そこにいないと感じれないものをつくる。（落合館）再現しきれないのも1つの魅力。

大阪ヘルスケアパビリオンでは、リアルな建築がもつ力を考えた。情報を伝えるのではなく、体験を身体に沈殿させること。非日常的な空間体験を通じて、万博の記憶とともに、空間の感触が人々の感覚に残る。これが目指した到達点である。

永山さんと組んで設計していたが、コンセプトは1枚のスケッチで表現。⇒仮設建築物ならではの障壁があった。コンセプトを実現するために、技術が無いと成立しなかった。

○視察メンバー：  
吉田悠起（三菱UFJ R&C）、山崎拓（安井建築設計事務所）、駒井陽次（Style-A）  
平野蔚仁（東畑建築事務所）、江原信一郎（大林組）、黒川祐樹（目建設計）  
吉永規夫（Office for Environment Architect）、牛込慎介（u.L.s）

# 会員の集い IN TOKYO 田原 幸夫氏 講演会と 会員交流懇親会 のご案内

日 時

2026年2月27日(金)

18:00~20:30

(受付17:45~)

建築CPD情報提供制度認定プログラム  
1単位(申請予定)

一昨年に再開した「会員の集い IN TOKYO」は、東京圏で活動する会員や転勤された方々の交流促進を目的としています。本会では今後も、地域を越えた横断的なネットワーク作りを継続してまいります。2026年度の「建築と社会」の特集テーマは「再生」です。既存の建物や地域を活かし、過去のものに新たな息吹を吹き込む取り組みは、現代の建築界において極めて重要なテーマとなっています。今回はこの趣旨のもと、文化遺産の保存再生の第一線で活躍される田原幸夫氏をお招きしました。会員同士の知見を広げ、親睦を深める貴重な機会となりますので、ぜひ奮ってご参加ください。

講演タイトル・主旨 **文化遺産の保存再生と建築家**

我が国において文化財、とりわけ重要文化財の保存事業における設計監理は、文化庁認定の文化財建造物修理主任技術者の仕事であり、一般の建築家はほとんど関わることがなかった。しかし現在、民間所有の現役の建物が文化財になるにつれ、重要文化財でも国庫補助金を用いない自己資金での保存事業が実施され、そうした事業に民間の建築家が積極的に参画するケースが増えている。

またこれからの持続可能な社会を構築する上で、都市内に大量に存在するストックとしての近現代建築を、壊すことなく使い続けることは必須のテーマであり、世界的にも“Living Heritage”という言葉が使われるようになった。そして、そこでの根本的課題は、文化遺産としての真正性（オーセンティシティ）と生活空間としての要求性能（安全性・機能性・快適性など）をいかに両立させるかということにある。さらに、長期的に優れた建物の維持管理システムを構築することなしに“使い続ける保存”は実現しない。これらの課題を前にして、今まさに、日本の建築家の文化遺産への、より積極的な取り組みが求められているのである。



田原 幸夫 TAHARA Yukio

建築家

生年月日・出身地 1949年12月16日 長野県生まれ

主な受賞

日本イコモス賞、日本建築学会賞、日本建築家協会賞、BCS賞、日本建築士会連合会賞 ほか

経歴

1973年3月 京都大学工学部土木工学科 卒業

1975年3月 京都大学工学部建築学科 卒業

1975年4月 日本設計 入社

1983年9月 ベルギー政府のフェローとして渡欧

ルーヴァン・カトリック大学大学院「建築と都市の保存修復センター」にて  
ディプロマ取得

ユネスコ世界遺産「グラン・ベギナーージュ」の保存活用設計に携わる

1996年10月~2003年10月 日本設計・保存プロジェクト総括

2003年11月~2012年10月 JRE設計・東京駅丸の内駅舎保存復原設計監理総括

2014年4月~2019年3月 京都工芸繊維大学KYOTO Design Lab特任教授

2019年4月~2024年3月 京都工芸繊維大学大学院 客員教授

現在 ヘリテージ・デザイン・アソシエイツ代表、日本イコモス国内委員会理事、DOCOMOMO Japan 監事

会 場 Open Innovation Biotope “Sea” (東京都千代田区紀尾井町4-1 ニューオータニガーデンコート3階  
株式会社オカムラ ガーデンコートショールーム内)

タイムスケジュール

開会挨拶 18:00~18:05

施設説明 18:05~18:15

講演会 18:15~19:30

親睦会 19:30~20:30

定 員 50名

参 加 費 (懇親会費込み) 会員無料、一般3,000円

QRコードもしくは、ホームページからお申し込みください。

お申し込み後、協会よりご連絡いたしますので、一般の方は事前に銀行等で参加費の振込をお願いします。

問合せ・申込先

一般社団法人日本建築協会(担当:中内)

TEL: 06-6946-6981

FAX: 06-6946-6984

E-mail: jigyoka@aaj.or.jp



お申込みはこちら

## 第9回片岡安賞 (日本建築協会論考コンクール) 一次審査通過 論考発表



第9回片岡安賞（日本建築協会論考コンクール）は、募集テーマを「100」とし、昨年6月から10月に論考を募集しました。11月から本年1月にかけて一次審査を実施し、下記の3編が選ばれました。来る3月には執筆者と審査委員との対話を視聴いただける公開プレゼンテーションを開催予定です。お申し込みは下記「視聴者募集のお知らせ」をご参照ください。

### 第9回片岡安賞（日本建築協会論考コンクール） 一次審査通過論考（受付順・敬称略）

- ・「100」をめぐる建築の哲学 — 医師から居住者となった私の視点  
八巻 孝之
- ・100の外側で生きる—都市の余白とインフォーマルな時間—  
小泉 満里奈
- ・2045 虚構から感じる幸福な空間  
白木 美由紀

## 第9回片岡安賞 一次審査通過者による オンライン 公開プレゼンテーション 視聴者募集の お知らせ

日時  
2026年3月20日(金・祝)  
14:00~16:00(予定)

第9回片岡安賞 一次審査を通過されたプレゼンターによる発表と、熱意に満ちた審査委員との質疑応答を、ぜひライブでご視聴下さい。

### ■論考コンクール審査委員会



審査委員長  
松村秀一  
神戸芸術工科大学  
学長



審査委員  
倉方俊輔  
大阪公立大学  
教授



審査委員  
岡絵理子  
関西大学  
教授

■定員 100名（先着順）

■参加費 無料

### ■視聴方法

Microsoft Teams会議を使用します。協会事務局より送りするメールに記載されたリンクをクリックすると、Microsoftアカウントをお持ちでなくても、ゲストとしてご参加いただけます。

※音声とカメラをオフにしてのご参加となります。

※チャット等での質問は受け付けできません。

※受付後、当日のプログラムやTeamsリンク先などを後日メールでお送りします。

### ■申込方法

E-mailもしくはホームページからお申込ください。

①催し名：公開プレゼンテーション

②氏名（ふりがな）

③職場名または学校名

④連絡先電話番号

⑤E-mailアドレス



お申込みはこちら

### ■申込先

(一社)日本建築協会（担当：磯・中内）

E-mail : hensyu2@aaj.or.jp

TEL : 06-6946-6981

### ■申込締切

2026年3月17日(火)

※定員になり次第、締め切らせていただきます。

※電話でのお問い合わせは3月16日(月)まで

## 第11回学生のための 現場見学会 「新・琵琶湖文化 館(博物館) 現場見学会」 (第1回/全2回)

日 時  
2026年3月13日(金)  
15:00~17:00(予定)  
受付開始 14:30

講師 安井建築設計・隈研吾建築  
都市設計共同企業体  
松村 明 氏 (工事監理者)

大林組・笹川組建設工事共  
同企業体 琵琶湖文化館JV  
工事事務所  
小原 英幸 氏 (工事長)



お申込みはこちら

滋賀の文化財を未来に伝える「希望の船」がいよいよ姿を現します。安井建築設計・隈研吾建築都市設計共同企業体による「新・琵琶湖文化館」の建設現場にて、全2回のシリーズ見学会を開催します。本企画の醍醐味は、第1回(3月)と第2回(11月予定)、2つの時点から同じ現場を見つめることにあります。第1回で触れるのは、文化財を守る基礎免震構造や建物の力強い骨格。そこから約半年を経て、第2回ではどのように意匠が施され、空間が劇的な変化を遂げるのか。一過性の見学ではなく、建築が誕生するプロセスそのものを追体験できる構成です。設計者の意図が施工現場でどう具現化されていくのか。教科書を越えた学びと、クリエイティブな刺激に満ちた体験がここにあります。文化と技術が交差する最前線で、建築のダイナミズムを肌で感じてください。



希望の船を表現する外観イメージ

### 【建築概要】

工 事 名：滋賀県立琵琶湖文化館  
整備事業  
発 注 者：滋賀県  
建 築 主：(株)琵琶湖C&S  
設計・監理：安井建築設計・隈研吾建  
築都市設計共同企業体  
施 工：大林組・笹川組建設工  
事共同企業体  
工 期：2025年3月~2027年3月  
末引渡し

### 建築規模

階 数：地上4階PH1階  
構 造：RC造(一部S造、SRC造)  
建築面積：2,362.01㎡  
延床面積：6,644.23㎡

所 在 地 滋賀県大津市浜大津五丁  
目1-1  
最 寄 駅 京阪京津線「びわ湖浜大  
津」駅 徒歩5分  
JR「大津」駅 徒歩15分  
集 合 場 所 現地(詳細は参加証に記載)  
定 員 20名(先着)  
参 加 費 無料

### 申込方法

- ①催名「新・琵琶湖文化館現場見学会」
- ②学校名・学部・学科・学年
- ③学生氏名(ふりがな)
- ④引率者 職名・氏名(ふりがな)  
※学生のみの場合不要
- ⑤連絡先電話番号・E-mail  
上記を明記しHP又はE-mailにてお申し込みください。  
参加証は後日送信します。
- ⑥全2回参加、第1回のみ参加の区分

### 申込締切日

2026年3月6日(金)  
\*ただし定員になり次第、締め切らせていただきます。

### 問合せ・申込先

一般社団法人日本建築協会  
(担当：中内)  
TEL：06-6946-6981  
FAX：06-6946-6984  
E-mail：jigyoka@aaaj.or.jp



西側広場からの外観イメージ



エントランスホールのイメージ

◆ 第9回 建築セミナー ◆

主催：日本建築協会出版委員会 共催：学芸出版社

日本建築協会出版委員会では、著者をお招きし、気軽にご参加いただける連続セミナーを開催しています。第9回として、日本建築協会企画・西博康氏著『イラストと計算例でわかる 外装材の耐風設計・施工』の出版を記念して実施いたします。お申し込みをお待ちしております。

# イラストと計算例でわかる 外装材の耐風設計・施工

講師：西博康氏



**本書の活用マップ**

関連法令及び計算方法 (第1~2章) p.7~

接合部の強度検討 (第7章) p.195~  
 ボルト・ナット : p.196  
 タッセンねじ : p.210  
 スタッブ溶接 : p.222  
 あと施工アンカー : p.230

部位別具体的な活用方法 (第3~6章) p.69~

セッパック : p.132  
 屋根 : p.123  
 窓枠 : p.148  
 袖巻板 : p.148  
 フィン : p.148  
 ビル風対策 : p.161  
 庇 : p.146  
 ビロティ : p.150  
 植栽 : p.192  
 フェンス・基礎 : p.168

パラベット窓木 : p.126  
 屋上防水 : p.81  
 屋上目隠し壁 : p.121  
 建具・ガラス : p.99  
 バルコニー : p.132  
 扉・板 : p.144  
 軒天井 : p.150  
 自転車置き場 : p.186  
 金属板屋根 : p.70

屋上設備機器 : p.166  
 屋上設備ダクト : p.194  
 建物の高さ : p.35  
 高台の風 : p.157

外壁パネル : p.92  
 底 : p.146  
 シャッター : p.105

**第1章 なぜ耐風圧設計は必要かつ重要なのか**

太陽光パネルが多数設置された建物に激突

**第1章のポイント**

- 電巻は「想定を超える風」の領域に及ぶこともありますが、台風による風は、そのほとんどが法令の「想定範囲内」です。
- 建築に携わる技術者は、風害の実態をよく認識し、被害者が次の瞬間には加害者となる現実を理解しなければなりません。
- 設計者はその想定を適切に把握し設計しなければなりません。
- 施工者は、必要な強度設定を理解し、適切な施工管理を行う必要があります。
- 更に、設計者・施工者は共に、建築主に対し適切な維持管理の方法を伝えるなければなりません。
- 第1章では、耐風圧設計の法的な位置付けを認識してください。

10%超OFF・送料無料

使用テキスト A5判・256頁・本体¥2,700+税  
 受講者は税込¥2,970⇒**税込特価¥2,600**でご購入いただけます。

屋根、足場、庇、シャッター、防水、笠木、外壁、手すり、屋上設置物の飛散など、台風等による飛散被害が頻発するなか、すべての建物の設計・施工管理業務において耐風圧対策の重要性が高まっている。お客様を被害者・加害者にしないために、また生産者責任を追究されないために必要な知識を、実務者視点でやさしく解説。

〈講師プロフィール〉

西博康 (にし ひろやす)

1959年生まれ。1984年室蘭工業大学大学院工学研究科建築工学専攻修了後、清水建設株式会社に入社。以降、施工管理に従事。2011年関西事業本部建築技術部長、2020年関西支店品質長・上席エンジニア。2024年同社退職。「しずかるバー®」(遮音ルーバー)開発者(2019年プレス発表)。2013年一般社団法人日本建築協会常任理事・出版委員長。2025年 西建築エンジニアリング相談室代表。株式会社成和技術顧問。

このセミナーは、建築CPD情報提供制度認定プログラム申請中です。建築関連CPD (2単位)

日時：2026年4月15日(水)

18:00 ~ 20:00 (17:45開場)

場所：TOTOTechnical Center 大阪

大阪市中央区久太郎町3-6-8 JRE御堂筋ダイワビル2F  
 地下鉄本町駅から徒歩4分

受講料：	一般	¥3,000
	会員・学生	¥2,000

定員：60名



【申込方法】 このセミナーは前払制です。

下記をご記載の上、E-mailまたはFAXにてお申し込みください。

- ①催し名(第9回建築セミナー) ②氏名(ふりがな) ③ご所属 ④一般・会員・学生の別 ⑤電話番号
- ⑥E-mailアドレス ⑦CPD単位申請希望の場合は申請先団体名と登録番号

申込先：(一社)日本建築協会 TEL 06-6946-6981 FAX 06-6946-6984 E-mail: ken-shaik@aaj.or.jp (担当: 福原)

●お申し込み受付後、協会より参加費の振込先をご案内します。ご入金確認後、受講票PDFをお送りします。

【テキスト購入方法】 オンラインでお申し込みください。

受講をお申し込みの皆様に受講票をお送りする際に、テキストを**特別価格¥2,600(税込)**(通常価格¥2,970円(税込))・**送料無料**でお求めいただけるクーポンコードと書籍販売ウェブページをご案内します。4月1日(水)までのお申込みですと、セミナー前にご指定の宛先にお届けできます。当日の販売は行いませんので、ご購入ご希望の方は予めお申し込みください。

## 協会誌『建築と社会』掲載文における「著作権」についてのお知らせとお願い

一般社団法人日本建築協会（以下「本会」という）では、「著作権」に関して、協会誌「建築と社会」2018年6月号において『掲載された論文・記事の著作権を著者から本会に譲渡願うこと』とお願いをさせて頂きましたが、時代背景も変わってきたことから、著作権について、新たに以下の様に規定いたします。

### 1. 著作権について

- ・本誌に掲載された個々の論文・記事・図面・写真等の著作物の著作権は、各執筆者、制作者である著作者に帰属するものとします。
- ・協会誌「建築と社会」、協会WEBサイトにおける編集著作権は、発行者、制作者である本会に帰属するものとします。

### 2. 著作者人格権について

- ・著作物について、円滑な編集・公開のために、誤字脱字の修正や見出しの変更など、本会が必要と認める範囲で手直しをさせて頂いていただく可能性があるため、本誌にご投稿いただくことで、同一性保持権を行使されないことにご同意いただいたものとします。なお本会は、著作者の名誉を損なうことのないよう十分に留意いたします。

### 3. 著作者の責任

- ・著作者は、著作物が第三者の著作権・肖像権・その他の権利を侵害しないことを保証するものとします。
- ・著作物に関して第三者から権利侵害等の申し立てがあった場合は、著作者ご自身の責任において解決いただくものとします。

### 4. 本会への利用許諾

著作者は、本誌にご投稿いただくことで、ご自身の著作物について、本会が以下の目的で利用することを非独占的に許諾していただくものとします。

- ・協会誌「建築と社会」での掲載（複製）、及び頒布
- ・本会ウェブサイト等での公衆送信（会員限定公開を含む）
- ・本会が協会誌「建築と社会」掲載記事を記念誌等で転載再利用すること（データを再編集し転載することを含む）
- ・第三者から本誌掲載著作物について利用申請があった場合、本会がその利用を許諾すること

### 5. 著作者ご自身の利用について

本会に利用を許諾いただいた後も、著作者ご本人の権利として、ご自身の著作物を、ご自身の論文集への再録・ウェブサイトでの公開・研究・教育活動などで自由に利用することを、何ら妨げるものではありません。

### 6. 過去にご寄稿いただいた著作物について

過去に本誌にご寄稿いただいた著作物についても、上記趣旨をご理解いただき、ご同意頂いたものとして、取り扱わせていただきます。ご不明点がある場合は、2026年3月末日までに下記の本会事務局までお申し出ください。

#### 【問い合わせ先】

一般社団法人 日本建築協会  
担当：柏原  
TEL：06-6946-6981  
E-mail：kyoku-tyo@aaj.or.jp

# 若き創造者たちへ

## 「第73回青年技術者顕彰」のご案内

日本建築協会では、昭和29年（1954年）から「青年技術者」を表彰してきました。これは、35才以下の優秀な設計者、技術者、研究者等を対象とするもので、若手建築技術者のいわば登龍門として定着しています。

今年も、青年技術者選考委員会を設けて、計画・設計・構造・設備・施工管理およびその他の分野について青年技術者を表彰します。

選考は有識者による選考委員会が行い、選出された方は、本会総会での表彰、「建築と社会」への掲載等を予定しています。建築界の様々な分野で活躍されている皆様の積極的なご応募をお待ちしています。

### 応募提出規定

1. 応募できる人は満35歳（2026年3月31日現在）以下の本会個人会員に限ります。
2. すいせん者を併記し、すいせん者1名につき被すいせん者（青年技術者）1名とします（同一すいせん者が複数の応募者をすいせんすることはできません）。すいせん者は被すいせん者の勤務する組織の上司か上長とします（組織の代表者や所属部署の長でなくとも構いません）。すいせん者が学校教官である場合はこの限りではありません。本人が組織の代表者である場合は自せんとします。  
また、組織内で専門分野ごとのすいせんは1名のみとし、複数名のすいせんは不可とします。ただし、組織内の同一分野であっても職種が異なる場合はそれぞれのすいせんは可能です（例：設備分野における「設計」と「施工」、設備設計分野における「電気設備」と「機械設備」、施工分野における「現場での施工管理」と「店社での技術開発・施工計画等」など）。組織の単位は支店もしくはそれに類する営業所を1単位とします。
3. 応募分野は特定しません（建築に関するあらゆる分野を対象とします）。応募者は、たとえば計画、一般設計、住宅・インテリア設計、構造、設備、施工管理、技術開発、行政、情報、コーディネート等の分野にあって、成し遂げたすぐれた実績について、下記の提出資料をPDF形式とし、期日までに申込先のメールアドレスへご提出ください。  
なお提出資料の返却は行いません。  
応募資格・応募分野に関して不明な点があれば本会事務局までお問い合わせください。
4. 提出された資料は「青年技術者選考委員会」において選考します。
5. 「青年技術者選考委員会」において選出された青年技術者は本会総会において表彰し、「第73回青年技術者特集号」（2026年7月号予定）に掲載します。
6. 提出資料（下記の順に資料を構成すること）

#### ■応募用紙

本会事務局で発行、またはホームページからダウンロードしてください。



#### ■略歴・業務経歴（A3版1枚／書式は任意）

本人の顔写真、氏名、生年月日、最終学歴、保有資格、業務経歴等を記載してください。

#### ■選考資料

##### A：青年技術者の思い（A3版1枚／書式は任意）

青年技術者の思いを端的に表すタイトルを記載してください。また、本人の建築、都市、環境などに対する考え方、取り組み姿勢と将来展望等についてまとめてください。文字だけでなく必要に応じて図表、写真等も用いてもかまいません。ただし、応募者本人の執筆に限ります。

##### B：業績資料（A3版1枚／書式は任意）

これまで関わったプロジェクトや取り組みについて概要をA3版1枚にまとめてください。各プロジェクトは時系列にまとめ、概要や特徴を端的に記載するほか、プロジェクト毎に本人の関わり方や果たした役割について明記してください。

##### C：特に注力したプロジェクトに関する資料（A3版4枚以内／書式は任意）

Bに記載したプロジェクトのうち、本人が中心となって特に注力したものを1または2選定し概要をまとめてください。プロジェクトにおける本人の立場や役割のほか、特に貢献した、力量が活かされたと思われる成果について詳細に記載してください。

※A～Cの資料について書式は任意としますが、鮮明な写真、配置図および主要平面図、概要、設計要旨、概念図等を用い、プロジェクトや計画の内容がはっきりわかる表現としてください。

#### 7. 選考基準

提出資料をもとに、これまでの業績に対する評価と共に、本人がどのように貢献し、力量を発揮したか、どのような姿勢や想いで取り組んだか。また、本人の建築、都市、環境などに対する考え方、取り組み姿勢や将来展望を総合的に評価します。

#### 8. 提出期限 2026年3月31日（火）

9. 申込先 （一社）日本建築協会「青年技術者選考委員会」  
〒540-6591 大阪市中央区大手前1-7-31  
OMM7F  
TEL：06-6946-6981 FAX：06-6946-6984  
E-mail：jigyoka@aai.or.jp

10. 提出方法 PDFデータで3月31日23時55分までに送信

#### 11. 青年技術者選考委員会

委員長	三宗 知之	／(株)東畑建築事務所本社オフィス大阪副代表
委員	駒井 陽次	／(株)Style-A一級建築士事務所代表取締役
	橋本 修	／(株)昭和設計理事
	水方 秀也	／(株)竹中工務店開発設計画本部長（西日本担当）
	安福 健祐	／大阪大学D3センター教授
	秋田 智	／(株)安井建築設計事務所大阪事務所構造部部长
	瀧野 敦夫	／大阪工業大学工学部建築学科准教授
	澤村 晋次	／(株)日建設計エンジニアリング部門設備設計グループ副代表
	高橋 満博	／清水建設(株)関西支店設備設計部部长
	青木 康造	／大成建設(株)関西支店建築部技術室長
	湯浅 肇	／(株)大林組大阪本店建築事業部生産技術部部长

## 第32回 会員特集 “私の空間作法”

会員の皆さまの発表の場となる「私の空間作法」を今年もお届けします。

今回から掲載の対象を拡大しました。従来は、建築やランドスケープ、インテリア、まちづくり、アート空間などを対象としていました。今年はそうした空間デザインに加えて、建築構造や設備に関する話題のほか、会員の皆さまの様々な活動（思い出の風景、旅行記、仕事以外の趣味の紹介、日ごろ思い描いていることなど）を広く募集しました。

その結果、様々な内容で幅広くご応募いただきました。普段あまり触れたり考えたりすることのないようなものもあり、これまで知らなかった（気にしていなかった）世界を少し垣間見ることができる特集となりました。

330年ぶりの大屋根瓦の葺き替えやこだわりの住宅、地球一周、懐かしい大阪の風景などなど、さまざまな「作法」や「こだわり」を楽しんでいただければ幸いです。

ひと・まち・建築小委員会



# 1970 思い出の風景 2025 建築家の旅の続き

塚口明洋 塚口明洋建築研究室



1970年空堀地区の風景



1970年まちに残っていた空地



路地で遊ぶ子どもたち

1970年大阪 戦災に遭わなかったまち

昔も今も子供たちを見ていると幸せそうに見える。そんな世界の中で建築家の役割は微力だと思うが、空間をデザインする建築家だからこそ気がつく、思い出の風景の大切さをみなさんに知ってもらいたいと思っている。

(ブログ/建築家の旅の続き より)



1970年戦災に遭わなかったまち野田



関西大学キャンパスの樹木



千里山駅から歩いて10分の田園風景

2025年 建築家の仕事をやめて2015年頃から千里丘陵や阪神間の街歩きをする。すっかり大きくなった木の緑豊かな風景を楽しむ。

千里ニュータウンや周辺に残る懐かしい集落、神社、田園風景を見る。関西大学前の我が家から2時間で万博公園に歩いて行く道が面白い。

家のすぐ後ろにある関大のキャンパスから歩き始める。千里山から歩いて10分のところの田園風景を通り抜けると佐井寺の旧集落がある。次に千里ニュータウンの周辺緑地帯を超えると山田の旧集落に入る。そこを抜けて万博の外周道路を横断すると、万博跡地に残された太陽の塔が見える。子供たちが広い空地で遊ぶ「奇跡の万博公園」の森に到着する。



千里ニュータウンの周辺緑地帯



「奇跡の万博公園」の森



万博公園どんぐり池で遊ぶ子供



万博公園と「太陽の塔」が見える



山田の旧集落

# 薄くて軽い緑の屋根から思いを馳せる

渡辺智恵 有限会社 照花



建築物の緑化は、室内や近隣への照り返しを軽減するだけでなく、周辺や室内の温度低下も見込め、CO<sub>2</sub>排出の削減も担うなど、人や環境に良い影響をもたらす。また、屋根や外壁に整然と広がる緑は建物や地域の景観の向上にもつながるなど、次世代への貴重な贈り物となる。

人と自然の関係の再生にたずさわる環境再生医として目指したのは、荷重制限のある既存の建築の上に気軽に緑化を楽しんでもらうことだった。施工時の厚みが3cmと薄くて軽量の屋根や屋上の緑化に30年近く取り組んできた。緑の軽量化は、緑化コストを抑え、建築構造物への負担も小さく、建物を強化する必要がないので、既存建築への緑化を容易にする。

もちろん自然の土壌ではないので、育成や維持管理には水やりが必須となる。そのため、散水の手間を極限まで減らすなどメンテナンスの負担を軽減し、維持管理も含め緑をずっと楽しんでもらうための方法も提案し続けてきた。

たとえ小さな住宅の緑化でも、積み重ねることで都会のヒートアイランド現象の緩和につながり、さらにはCO<sub>2</sub>の排出削減にも一役担う事が出来ると考えている。

## 緑の屋根

所在地	愛知県内4カ所
施工(有)	照花
緑化面積	43~260㎡
工法	薄層・軽量MP緑化工法
竣工	2024年8月~2025年10月
撮影	照花

# 地形と呼応する建築

吉永規夫 Office for Environment Architecture ・ 畿央大学



北側外観



リビングからテラス方向を見る



北西側夜景



リビングからダイニング、キッチンを見る



2階レベルから階段越しに西側開口を見る



寝室から洗面所方向を見る



ダイニングからリビングを見る



リビングからテラスを見る



子供部屋から寝室を見る



北西側遠景

長崎県佐世保市は、海は九十九島、山は烏帽子岳と海から山までの距離は近く豊かな自然が連続的に広がっている。

敷地は中心市街地からほど近い、古くから広がる急峻な住宅地の中腹に位置する。段差・路地は多いが「良い地形」の住宅地である。建主は海が見下ろすことができるこの土地を気に入って家を建てることになった。西側前面道路から5m高く、東側の路地からは4m低いという大きな高低差が敷地内である。周辺の住宅の多くは平地に最大限配置しているが、地形の特性を活かした構成として内部空間と外部環境の連続性を高め、動線・視線・風の流れが地形と調和する計画とした。1階は2間の奥行きとして庭を半分以上残し、室内と外部デッキの庭、眼下の風景が同じ比率で感じることができる。2階は1.5間、3階は1間と段階的に半間ずつ小さくなるように積層した。寸法的には小さくなるが、内部空間が単独で収束するのではなく、外部環境との連続的な関係性が生まれ、地形に沿って、地形に発散する。螺旋階段と吹き抜けを家の中心に配置し、日常の上下方向の移動は2階の床レベルより高い位置に東側の路地が現れたり、西に沈む夕陽を意識したりと佐世保の地形を身体的に感じることができる。

長崎県の「良い環境」を建築化するシリーズとして「ヨシナガサキ」と名付けて、これからも継続して実践していきたい。

## ヨシナガサキ02

所在地	長崎県佐世保市
設計	Office for Environment Architecture
施工	池田良工務店
敷地面積	197.82㎡
建築面積	43.76㎡
延床面積	98.01㎡
構造規模	木造、地上3階、新築
竣工	2025年3月
設計協力	吉永京子 北野勝己
撮影	針金洋介

# 家族の物語を紡ぐ住まい

岸 — アトリエJIGSAW



つむぎ

「紡ぐ」という言葉を設計コンセプトとし、過去の意匠や素材、現代の家族の形、そして未来の暮らしを見据えて計画した住まいである。家は建てて終わりではなく、暮らしの中で思い出が積み重なり家族の物語として紡がれていく。創業110年を超える歴史と伝統を背景に、二世帯住宅、大屋根の単世帯住宅、平屋のような暮らしなど、多様な住まい方に対応した設計とした。

回遊動線や家事動線、二型キッチンなど、日々の暮らしを快適にする工夫も随所に盛り込んでいる。家族構成やライフスタイルの変化にも柔軟に対応できる、普遍性と可変性を備えた住まいである。

所在地	広島県広島市
施工	山根木材ホーム(株)
建築面積	149.37㎡
延床面積	187.73㎡
構造規模	木造、地上2階
竣工	2024年10月
撮影	西田英俊

# 構造設計の信念を暮らしに刻む

朝日智生 株式会社 日建設計



離れから家族と母屋を見守る



早朝の冬景色



発災後の損傷調査と設計手法の検証を容易にする構造あらわし

## 文殊の家

濃尾地震から130年——地震の記憶が刻まれた岐阜の地で、「地震後も住み続けられる住宅とは何か」という問いに、自邸『文殊の家』で応えた。

地盤から構法、接合部、材料、評価法、暮らし方に至るまで、法制度の枠を超え、多角的・実証的な検証を重ねた。構造体をあらわしとすることで、損傷や生活継続性を建築主自身が見極められる仕組みを構築。柱梁の規律ある配置は、力の流れを空間に可視化し、秩序と陰影を生みながら、暮らしの記憶を育む。思想を反映した金物や釘配列は、住まい手だけが読み取れる部材耐力の“暗号”として、損傷確認の目印になると同時に、暮らしに知性と誇りを与える。

実現象に迫ることは技術者の使命であり、構造設計者の責任と可能性は法制度の外側にこそ広がっている。今、改めて問いたい——「本当に必要な耐震性能」とは何か。

所在地	岐阜県本巣市
設計	朝日智生 GA設計事務所
施工	松久建築、丸島工務店 リビングデザイン
建築面積	138.23㎡
延床面積	172.57㎡
構造規模	木造、地上2階
竣工	2024年3月
撮影	朝日智生

# 小さな丘のような学祭の居場所

水谷俊博 + 武蔵野大学水谷研究室



## One Step Beyond —アーチの森2024—

東京都の西部、西東京市に位置する武蔵野大学の学園祭である第57回（2024年度）摩耶祭において、仮設木造建築物の設計・制作・施工をおこなった。建築物の建設サイトがキャンパスの正門からダイレクトにアプローチする場所に位置し、キャンパスの入口として来場者を迎え入れ、かつ人々が集うという機能をもたせる場所づくりを目指した。

45mm×45mmの断面をもった杉材と合板によって組み立てた階段状のユニット（総数約50ユニット）を、少しずつ位置をずらしながら配置し、ゆったりと曲面を描いた形をしたトンネル状の空間に包まれる丘のような形態を形成している。階段状のステップをさまざまなレベルに設定することにより、作品に触れる人々が、思い思いの姿で佇む場をうみだしている。またステップ状の面に多様な展示・掲示物を設置することができ、学園祭の情報発信の場としても機能している。

太陽の動きや光の変化によって生まれる影が、「アーチの森」の木の構築物のフレームを通して季節や時間の経過による空間の表情を豊かに彩り、キャンパスに集うさまざまな人々の関係を緩やかに結び付け、多彩なアクティビティがうまれる場所をうみだした。また、会期終了後は近隣小学校での造形ワークショップに再活用され、こどもたちの美術教育にも有効に活用されている。

所在地	東京都西東京市
施工	武蔵野大学水谷俊博研究室
建築面積	38.51㎡
構造規模	W造、地上1階
竣工	2024年10月
撮影	武蔵野大学水谷俊博研究室

### 制作担当メンバー

鳥居陽菜、榎本陽菜、白石大翔、梅田皓亮、小松香穂、齋藤萌果、高橋葵子、渡部 純

### 制作サポートメンバー

川場くるみ、齊藤綺李、島田美空、梅原花菜、岩元愛莉、柏崎青陽、菅野晃司、松本 明、田上海颯、石塚歩太、小野寺駿

# カラフルな学生生活、その中心となる場所

今村友里子 舞鶴工業高等専門学校



舞鶴工業高等専門学校（舞鶴高専）には800人の学生がいる。そのうちの600人が寮生であり、多くの若者が昼も夜も舞鶴高専の敷地内で暮らしている。15歳から22歳までの若者が暮らしているというのに、校舎はどこもかしこも灰色で、ときめきのない空間となっていた。そこで、長らく放置されていた空きスペースを改修し、教室として利用でき、休み時間や放課後には自由に利用することができる空間を新たにつくった。

天井を取り払って構造体をあらわにし、床はシートを剥がしてコンクリートスラブを研磨した。そうしてスケルトンにした後、内装のカラフルな壁、照明、机椅子、個人ブースは、すべて学生と教職員によって製作した。カラフルな壁はパネル状にカットした合板を着色液に浸すことで染色している。

現在、この空間は建築系の学生が設計課題に取り組む場としても活用されており、学生の学びと創造の拠点となっている。

## 舞鶴高専図書館 1Fラーニングcommons

所在地	京都府舞鶴市
設計者	尾上亮介・今村友里子・高本優也+舞鶴高専有志
施工	(株)西工舎
延床面積	162㎡
竣工	2019年11月
撮影	舞鶴高専

# 330年余り手付かずの本瓦の葺替えと瓦下地の保存の試み

上田寛彬 環境創造サポートセンター / 吉永規夫 畿央大学 人間環境デザイン学科

73%の谷川瓦を再利用した、修理後の本堂屋根 全景 撮影：大坊 崇



再建当時から手付かずの瓦下地（野地）



既存の野地の上に合板を伏せて、再建当時の瓦下地を温存



ルーフィングを用いた空葺きとし、元禄時代の瓦の再利用を試みた



興善寺本堂は大阪府の南西端、岬町谷川に建つ、元禄3年（1690年）に再建された建物である。谷川は和泉山脈を背に大阪湾を望む。良質な粘土や、燃料となる薪や松葉、搬出港近辺での生産が可能という条件が揃い、古くから瓦の一大生産地であった。本堂の屋根には、この谷川瓦が使用されている。今回の修理工事は、堂内に安置されている三尊（重要文化財）の国宝重要文化財等保存・活用事業の一環で行われた。



ドローンによる写真測量と屋根面の3Dモデリング

まず、修理前の屋根を、ドローンによる写真測量（フォトグラメトリ）、屋根面の3Dモデリング調査から、瓦の枚数や不朽箇所を確認した。経年や長年の荷重による一部の破損や、倒木・台風などによる被害は部分的なもので、再建当時から改造も少なく、比較的良好な状態であることが分かった。再建以来、大規模な葺替え修理が行われることなく、実に330年もの間、建物と仏像を守り続けてきたのである。

そこで、かつて瓦の一大産地であった「地元・谷川瓦を可能な限り再利用する（瓦の取替率30%以下）」を目標に掲げ、当初の形式・技法に倣う現状修理を修理の方針とした。また、屋根荷重軽減のため空葺きに改め、銅線を用いて瓦棧に緊結し、強風対策も施した。

①瓦の打音検査では、○と×の判断だけでなく、△を取り入れ、再用箇所の検討を重ねた。②限られた予算の中、素屋根をかける計画は困難であったため、下層→上層→下層の順で工事を進め、素屋根を必要としない工事計画とした。

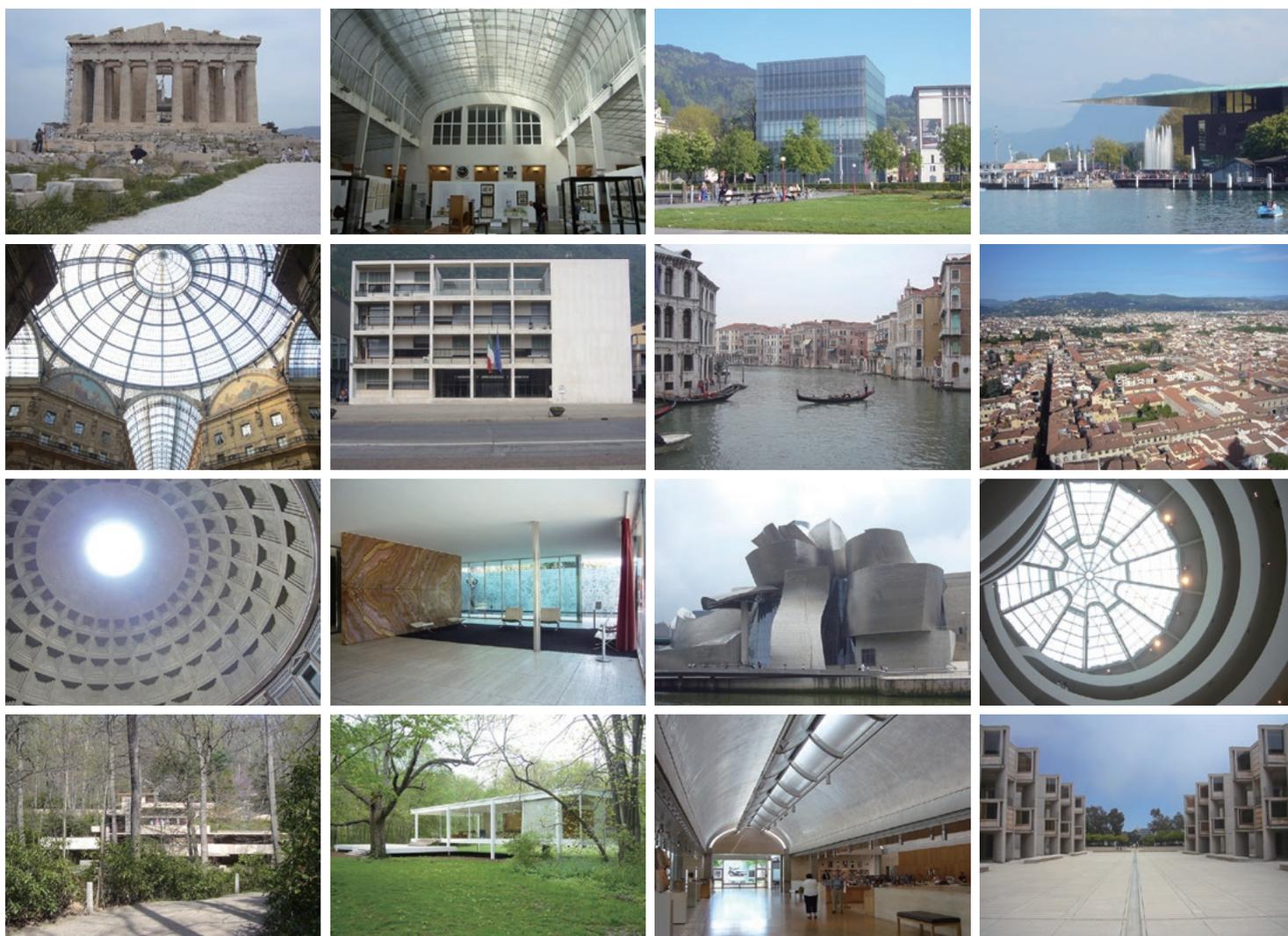
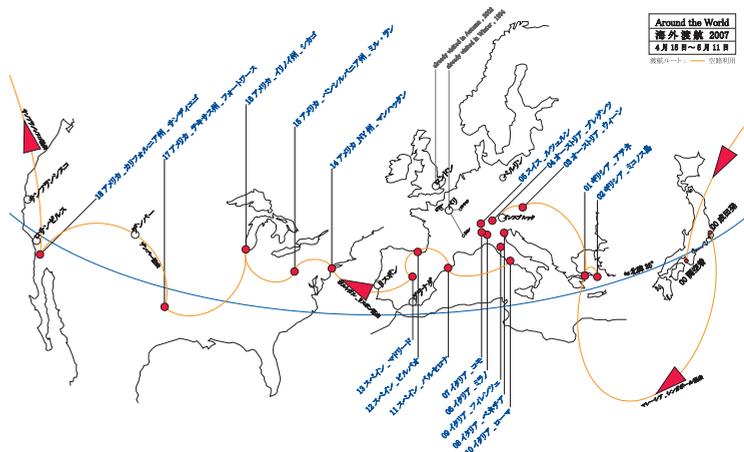
③また、330年前の瓦下地（野地）を現状のまま温存するために、既存の瓦下地の上に、合板とルーフィングという現代の技術を取り入れた。本保存修理では、当初の技法に拘らず、壊さないことを徹底し、丁寧な職人の仕事と現代の材料に頼ることで、保存と漏水対策との両立を図り、再用率73%の谷川の瓦と、330年前につくられた瓦下地を次世代へと残すことを試みた。

## 興善寺本堂 屋根葺替 保存修理

所在地	大阪府泉南郡岬町多奈川谷川1460
指導助工	文化財建造物保存修理主任技術者 鳴海祥博 (㈱誠廣)
構造規模	桁行5間 15.38m 梁間4間 12.01m 二重 寄棟造 本瓦葺 平入り 南面
修理完了	2024年12月
撮影	大坊 崇

# Around the World ; 海外渡航-18 都市と建築 / 地球一周を巡る

加藤正浩 KATO建築研究所 一級建築士事務所



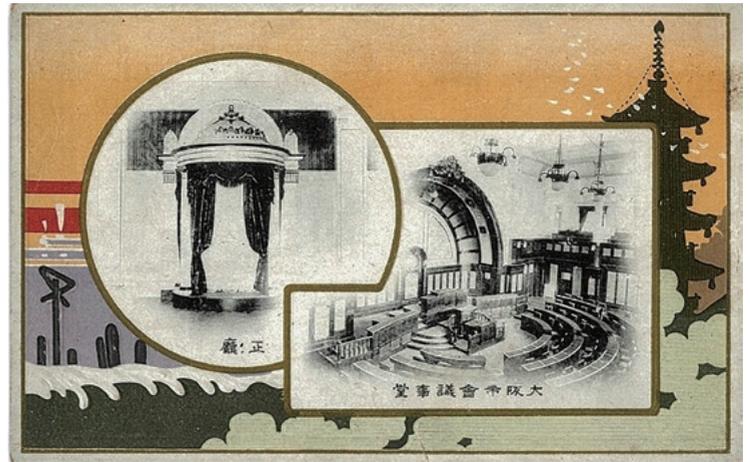
2007年春、私こと幸いに世界一周航空チケットを活用し、西欧諸国の建築と都市 / 地球一周を巡る海外渡航を敢行しました。自身の事務所を開設して後、27日間18都市に於いて各都市1つの世界的名建築を主眼に選定しての実行で、日本よりギリシアを始点とし - アテネ - ミコノス島 - ウィーン - プレゲンツ - ツルヴェルン - ミラノ - コモ - ベネチア - フィレンツェ - ローマ - パルセロナ - ビルバオ - マドリード - NY - ミラン - シカゴ - フォートワース - サンディエゴ - 日本に帰国するサーキュレーションで。世界の巨匠達による各地の名建築は、復元や再生等の努力を経ての貢献もあり、今も燦然と輝く記念碑的建築群です。その後既に18年余りが経過、更に名建築が多数 世界各地で建設されている現在、また渡航敢行できれば幸いて。また、世界はコロナ禍も経験、各地で紛争が未だ絶えない今ですが、平和を希求し、地球の人々 / 都市や環境の未来のために、今後も建築設計活動を継続してゆく次第です。

# 絵葉書の中の大正から昭和の大阪

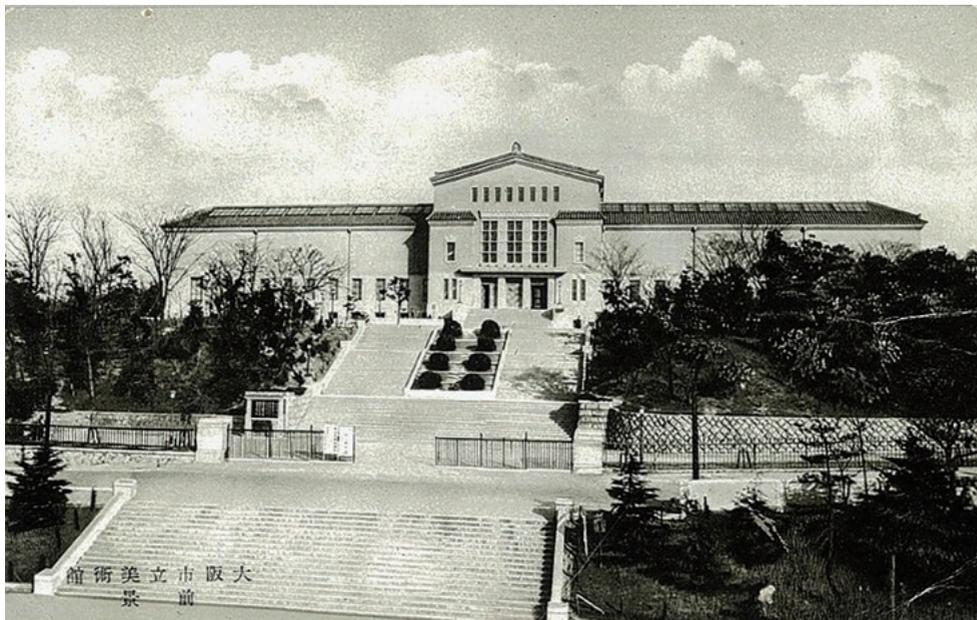
豊田充広 高松建設株式会社



大阪市電20周年記念



大阪市長会議事堂・正庁



大阪市立美術館：前景



大阪市立美術館：展示室



難波高島屋百貨店

この絵葉書は私の母方の祖父の遺品から見つけました。  
祖父は、昭和初期ごろ大阪の鶴橋で写真館を営んでいて、報道や建築、役者、遊覧バスなどの写真を撮影していたようで、残されていた写真の中に数点の当時の絵葉書もあり、祖父が撮影したものかどうかまではわかりませんが、その一部を紹介させていただきます。

# もうひとつの大震災

澤田純一 兵庫県

阪神淡路大震災（1995年）から31年。今では4人に1人が大震災後の生まれとなり、記憶や教訓の継承が今後の課題となりつつある。

その阪神淡路大震災からさらに70年前、もうひとつの大震災が関西で発生している。1925年に兵庫県北部の豊岡、城崎に大きな被害をもたらせた北但大震災である。

101年前の災害となると、直接経験した人は極めて限られているだろう。その2年前の1923年には関東大震災が発生しているが、当時の豊岡や城崎の人たちがどこまで「明日は我が身」と備えていたかはわからない。

被災地には、復興時（昭和初期）に建てられた建築物群が今も多く残る。震災の経験から、低層でも鉄筋コンクリート造であったり、木造でも防火仕様となっているものが多い。今となっては震災の教訓を伝える貴重な存在である。



北但大震災 (豊岡市HPから)

発 生 年 月 日	大正14 (1925) 年 5月23日午前11時9分
地 震 規 模	マグニチュード6.8
震 度	震度6 (当時の最大階級)
全 焼	1,712戸
全 壊	826戸
死 者	420人
負 傷 者	792人

## 北但大震災からの復興を今に伝える復興建築物群

復興期の建築物がまちなみの一部を形成し、震災からの復興を今に伝える重要な景観遺産となっている。



旧豊岡町役場庁舎 (設計 原科準平 1928)



旧兵庫懸農工銀行豊岡支店 (設計 渡辺節 1934)

どんな大災害でも70年経つと教訓ではなく遠い昔の出来事になってしまう。阪神淡路大震災の発生前、「関西では地震は起きない」と多くの人が勝手に思い込んでいたのでは。私もその一人。

阪神淡路大震災の経験もいずれ遠い昔の出来事になってしまうだろう。記録は残っても、教訓は色あせていく。

南海・東南海トラフ大地震だけではない。いずれまた関西のどこかで大きな地震が起こるだろう。

地震の発生は誰にも止められない。せめてしっかり備えよう。



大開通南側長屋

# 過去に思いを馳せ左舷着けとする

柏原忠明



## 私は船を舫う時、過去に思いを馳せ左舷着けとする。

船は建物と似通う部分があると思う。外殻があり、電気、衛生、空調設備を備え、人が憩い、作業をし、食事をし、就寝する場となる。大きな違いは移動できること。その船について、私の作法は左舷着け。

約千年前の船には、右舷側に右手で操作する<sup>\*1</sup>大きな操縦用の櫂が取り付けられており、接岸する際は、その櫂を傷つけないように左舷接岸をしていた。今では舵が用いられているため、右舷接岸でも支障はないものの、可能な場合は左舷接岸することが慣習となっている。

その慣習より、左舷側を「ポート (port) サイド [港側]」、右舷側を「スター (steer) ボードサイド」という呼称が、世界共通で使われている。飛行機、宇宙船でも同じ呼称が使用されており、飛行機では、左側 (ポートサイド) に搭乗橋 (ボーディングブリッジ) を着けることが広く知られている。

余談だが、飛行機、宇宙船では、右側灯火 (右舷灯) は緑、左側灯火 (左舷灯) は赤、長をキャプテン、乗組員をクルー、客室をキャビン、厨房をギャレーといい、飛行機では距離、速さの単位をノーティカルマイル<sup>\*2</sup>、ノットとしていること等も船舶に由来する。

また、人は左足を軸に方向転換する傾向があるので、港町では、接岸する船の船尾側に酒場があるとされている。

※1：世界のどの地域においても、約90%の人が右利き  
 ※2：1ノーティカルマイル=緯度1度分の距離

伊島港 (四国最東端)	尾道港 (瀬戸内)		
	福良港 (淡路島)		
	吉田港 (小豆島)      日和佐港 (南阿波)		
居室 (キャビン)	ギャレー	分電盤	お手洗い

## TERRA

設計・建造	林賢之輔・岡崎造船所
長さ	30feet
喫水	1.74m
排水量	3.25トン
セール面積	41.76㎡
エンジン	ヤママー3YM20SD
撮影	瀬戸口哲夫

## 会員特集いかがでしたか

32回目となった恒例の会員特集（空間作法）でしたが、いかがでしたでしょうか。従来とは違った内容のものが、はたしてどのくらい応募していただけるのか、期待と不安の両方をいただきながら今回の企画をスタートしました。ふたを開けてみると、予想以上に多岐にわたる内容となりました。従来の空間意匠以外にも様々な思いやこだわりをご紹介することができました。

ご応募いただいた皆さまありがとうございました。

## ぜひご応募ください

会員特集は、年に一度の皆さまの貴重な発表の場です。来年以降も今回同様の形で特集を続けたいと考えています。ぜひご応募ください。

原稿の募集につきましては、あらためて「建築と社会」の誌面上で会告を掲載しますが、いつでも送っていただいて結構です（随時受付しています）。

## 掲載内容

写真	プリントの場合、サイズはキャビネ判程度。電子データの場合、解像度300dpi以上とする。CGやパース、コンセプト図も可。
説明文	(1) ページタイトル掲載内容を言い表すタイトル（施設名称は不可） (2) コメント 掲載内容に対する考え方や説明を300字程度で
建物概要	掲載内容が建築物である場合は、施設名称、所在地、設計者、施工者、建築面積、延床面積、構造規模、工期など

建築物など空間意匠以外に、

- ・ 建築構造や設備に関する最新技術や特殊技術等
- ・ 心に残る景観やまちなみ
- ・ 思い出に残っている旅の記録
- ・ 仕事以外に打ち込んでいる趣味や特技
- ・ なにげない日常の風景や日ごろ感じていること
- ・ ぜひ紹介したい身近にある美しい景色

など広く原稿を募集します（ただし、営業や商品の販売促進は不可）。

紹介したいこと、伝えたいこと、表現したいことをお持ちの皆さま、積極的に会員特集をご利用ください。

レイアウトしていない状態（写真、コメント、建物概要等がそれぞれバラバラ）でも結構です。

応募をお考えの方はぜひ協会事務局へご一報ください。

## 問合せ先

一般社団法人 日本建築協会

〒540-6591 大阪府中央区大手前1-7-31 OMMビル7F

TEL : 06-6946-6981 Email : hensyu@aj.or.jp

ひと・まち・建築小委員会担当：井筒

# 再エネを最大限活用する エネルギーマネジメントシステム ～T-Green BEMS RE Optimizer～

大成建設株式会社 清水博之

## ■はじめに

近年、脱炭素社会の実現に向けて工場などの施設には大容量の太陽光発電を設置するなど再生可能エネルギー（以降、再エネ）のニーズが高まっている。しかし再エネの発電量は、時刻・天候・季節などによって変動し、また工場の需要電力量は生産設備の運転状況によって大きく変動するため、大容量の太陽光発電設備を設置して再エネ利用の最大化を図ることは困難な状況である。そこで当社は、太陽光発電などの再エネの最適な利用計画の立案と最大限の活用を図ることが出来るエネルギー需給一体型管理システム「T-Green BEMS RE Optimizer」を開発し、大成ユーレック株式会社川越工場において、再エネで得られた電力の自家消費・蓄電・水素変換・電力自己託送を組み合わせた最適利用について実証を始めた。



写真1 大成ユーレック川越工場全景

## ■「T-Green BEMS RE Optimizer」の特長

「T-Green BEMS RE Optimizer」は、当社の建物エネルギーマネジメントシステムであるT-Green BEMSを機能拡張して開発したシステムであり、需要電力量と再エネ発電量を前日に一体的に予測し、余剰電力の最適な配分・利用計画の自動立案が可能となっている（図1参

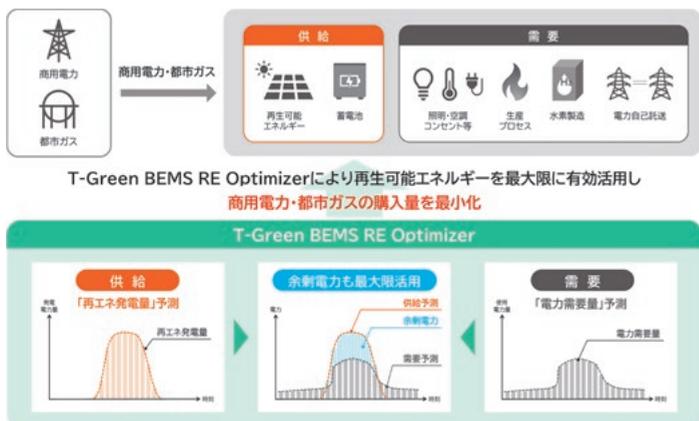


図1 T-Green BEMS RE Optimizerの概要

照)。クラウドシステムの活用により複数拠点での電力需給の変動状況をリアルタイムに把握し、再エネ余剰電力を工場での自家消費のほか、蓄電池への充電、P2Gシステム\*の運転によるグリーン水素の製造、当社横浜支店ビルへの電力自己託送を組み合わせた最適配分利用計画をAIが自動的に立案し、実施することができる。

## ■大成ユーレック川越工場における実証概要

本システムを導入し実証を行っている大成ユーレック川越工場は、中高層集合住宅のプレキャスト鉄筋コンクリート（PC）板を中心に多様な建築部材を製造している。

### （1）蓄電池の高速負荷追従制御

PC板製造工場では、クレーン運転時などの負荷変動が大きく、太陽光パネルの発電電力量も天候の影響などにより不安定なため、瞬時の電力変動がかなり大きくなる。本実証では、受電する建物や施設における電力需給の変動をリアルタイムで監視して、蓄電池への充電または電力不足時の放電を瞬時にやり、系統へ逆潮流しないように、高速負荷追従制御を行う。

### （2）グリーン水素から生成される蒸気を工場内で有効活用

P2Gシステムを用いて、太陽光発電による再エネからCO<sub>2</sub>を排出せずに製造するグリーン水素を燃料として水素燃料ボイラで蒸気を生成し、工場内で製造するプレキャストコンクリート部材の硬化促進養生に使用し、脱炭素化に取り組む。

### （3）横浜支店への電力自己託送

託送先である当社横浜支店ビルの需要予測を元に、託送計画をクラウドで自動立案し、電力広域的運営推進機関への託送計画申請から当日の実施までの全てを自動で行い、再エネ余剰電力の自己託送を行う。

## ■おわりに

今後当社は、O&M\*\*事業におけるエネルギーマネジメントにおいて、本システム「T-Green BEMS RE Optimizer」を適用して再エネ利用を最大化できる提案を行うことで、お客様の様々なニーズに合わせた最適なエネルギーマネジメントを支援することを目指す。

\* Power to Gas（パワー・ツー・ガス）電気エネルギーを使って水を電気分解し、水素などの気体燃料に変換して蓄えるシステム。

\*\* Operation & Management 運用と最適管理。



しみず・ひろき

大成建設株式会社 クリーンエネルギー・環境事業推進本部  
作業所の施工管理を経て、2024年よりエネルギーマネジメントシステムの開発に従事。

# 京都市の建築基準法適用除外指定制度 これまでとこれから

京都市都市計画局建築指導部建築指導課

歴史的建築物保存活用係長 向井(北岡) 愛

## ■ 3条その他条例による適用除外指定制度

### ●適用除外指定事例30件

京都市では、建築基準法第3条第1項第3号の規定「その他の条例」として、「京都市歴史的建築物の保存及び活用に関する条例」（以下、「3条その他条例」という。）を活用し、現行法の下では困難な建築行為を可能とすることで、景観的、文化的に価値のある歴史的建築物の保存活用を推進している。

2025（令和7）年度に、3条その他条例により適用除外指定した事例が30件に達したことから、今後の展開に向けて現状を報告する。

### ●適用除外指定事例の傾向

事例30件を分類したところ（図1）、建物種別では京町家や和風住宅などの木造建物が全体の7割を占め、建築行為等の種別では増築を伴うものが全体の8割以上であった。半数以上が用途変更を伴い、収益化を目的とした利活用のために適用除外指定を受ける事例も多く見受けられる。最近の傾向としては、第一種低層住居専用地域内での宿泊施設など用途規制に適合しない建築物の適用除外指定も増えている。

京都市では、民間が所有する建築物にも制度活用を積極的に促しており、設計者はゼネコンから個人事務所まで様々である。

建物種別	・京町家・民家・和風住宅 ・寺社・その他（歌舞練場） ・近代建築（非木造）	21件 5件 4件
建築行為等 （重複あり）	・増築を伴うもの ・用途変更（用途変更のみ） ・用途の不適合（内数）	25件 17（5）件 3件
所有者の属性	・個人 ・官公庁、学校、社寺等 ・民間企業	4件 10件 16件
設計者の属性	・ゼネコン・ハウスメーカー ・組織設計事務所 ・アトリエ・個人事務所	6件 4件 20件

図1 3条その他条例による適用除外指定事例  
※適用除外指定後の重要文化財指定により指定解除した事例含む

### ●3条その他条例による適用除外指定手続きの概要

3条その他条例による適用除外指定制度の手続きの流れを図2に示す。歴史的建築物の価値を残しながら建築行為等を行おうとする所有者（設計者）は、事前相談（a）を行い、「保存活用計画」を作成（b）、保存建築物の登録提案（c）を行う。これを受けて京都市は建築審査会の意見聴取を行い、当該建築物を3条その他条例に基づく保存建築物に登録（d）し、速やかに建築審査会の同意を得て適用除外指定（e）する。その後、

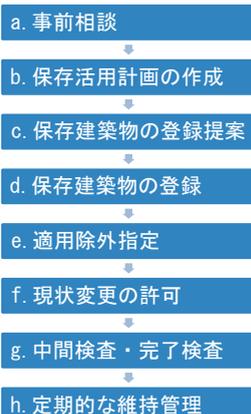


図2 手続きの流れ

所有者（設計者）は、現状変更の許可（f）を受けて工事を行い、中間検査・完了検査（g）を経て工事完了、供用開始する。工事完了後は定期的に維持管理報告や変更の届出を行う（h）。

京都市建築審査会は毎月開催されており（8月除く）、保存建築物の登録提案（c）からおおよそ2か月後に保存建築物登録（d）、その翌月に適用除外指定（e）、が標準的なスケジュールであるが、保存活用計画の作成（b）には3～6ヵ月程度を要し、案件によっては1年以上かかる場合もある。

## ■適用除外指定制度のこれから

### ●「保存のための措置」の適切な執行

建築基準法第3条第1項第3号の規定では、「現状変更の規制及び保存のための措置が講じられている建築物（保存建築物）」を建築審査会の同意を得て適用除外指定することになっており、3条その他条例では、「保存のための措置」として所有者の管理義務や維持管理の報告等を定め、適切に措置されない場合は指導や勧告等を行うことができる。保存建築物の将来に渡る「保存のための措置」の適切な執行のため、事前相談段階からの所有者と行政の良好な関係構築もこの制度を運用するうえで重要なポイントである。

### ●適用除外指定制度の積極的な活用に向けて

歴史的建築物の利活用の幅を広げる適用除外指定制度は、京都の歴史的町並み保全の観点から、今後も広く利用が進むと推察する。現在この制度の担い手となる設計者は限られており、京都市の事例紹介を見て、担当した設計者に依頼する例も見られる。設計者の方々には、時間と手間がかかるものの、情熱と覚悟をもって設計提案の幅が広がるこの制度の積極的な活用を期待している。

最後に、京都市の適用除外指定制度の普及と理解醸成のため2025（令和7）年3月にリーフレットを改定（図3）したので紹介する。



図3 条例リーフレット



条例リーフレット  
QRコードから  
ご参照ください。



事例紹介  
QRコードから  
ご参照ください。

むかい（きたおか）・あい

2007（平成19）年京都市入庁。  
2024年度から適用除外指定担当。

# 共催事業「第44回大阪都市景観建築賞（愛称 大阪まちなみ賞）」の受賞作品が決定

大阪都市景観建築賞運営委員会（大阪府・大阪市・公益社団法人大阪府建築士会・一般社団法人大阪府建築士事務所協会・公益社団法人日本建築家協会近畿支部大阪地域会・一般社団法人日本建築協会の6者で構成）では、周辺環境の向上に資し、かつ景観上優れた建物や建物を中心としたまちなみを表彰する「第44回大阪都市景観建築賞（愛称 大阪まちなみ賞）」における受賞作品を決定しました。

本年度は、令和7年7月1日（火曜日）から7月31日（木曜日）までの1か月間、広く一般から推薦を募集したところ、81件に及ぶ推薦があり、これらの建物や建物を中心としたまちなみについて、建築、都市計画、造園、デザイン、報道等の各分野の専門家8名で構成されている審査委員会（審査委員長：京都市立芸術大学名誉教授 藤本 英子）において審査したうえで、大阪府知事賞、大阪市長賞、審査員特別賞、奨励賞（5作品）を決定しました。

## 【受賞作品】

### 大阪府知事賞



茨木市文化・子育て複合施設 おにクル 撮影：Nacasa & Partners Inc.

### 大阪市長賞



御堂筋ダイビル

撮影：Akira Ito.aifoto

### 審査員特別賞



アーバンネット御堂筋ビル

撮影：Forward Stroke inc.

### 審査委員（50音順）

加藤精一（建築）（一社）大阪府建築士事務所協会理事

岸辺 護（新聞）読売新聞大阪本社編集局社会部長

嶋 高宏（デザイン）（一社）総合デザイナー協会 DAS 常任理事

武田重昭（造園）大阪公立大学大学院農学研究科緑地環境科学専攻准教授

寺地洋之（建築）（公社）大阪府建築士会特任顧問

橋寺知子（建築）関西大学環境都市工学部建築学科准教授

\* 藤本英子（芸術）京都市立芸術大学名誉教授

若本和仁（都市計画）大阪大学大学院工学研究科附属フューチャーイノベーションセンター准教授

（注）（ ）内は専門分野を表しています。\* 審査委員長

### 奨励賞（5作品）



高槻市安満遺跡公園パークセンター

撮影：高槻市



ONE DOJIMA PROJECT

撮影：Nacasa & Partners Inc.



イノベーションセンター MIZUNO ENGINE

撮影：株式会社伸和



JPタワー大阪

撮影：Akira Ito.aifoto



Cafe N+

撮影：三木夕渚

（順不同）



図1 現在の相合橋を東側から撮影



図2 相合橋位置

所在地：大阪市南区宗右衛門町（北詰）、南区道頓堀一丁目（南詰）

### ■はじめに

江戸時代に開削された道頓堀川には、現在16本の橋梁が架かる。相合橋は上流から2本目にあたり、初めて架橋されたのは貞享年間(1684~1688)とされる。道頓堀川に沿って南側、現在の道頓堀商店街一帯に建ち並んだ芝居小屋と、川の北側で発展した花街を結ぶ橋として利用され、はじめは「新中橋」や「中橋」と呼ばれていたが、後に「<sup>あいあはし</sup>相合橋」と、華やかな街の雰囲気になじむ美しい艶ある名前が付けられた。1962年に鉄橋化され、その後は周辺の変化に合わせて、1983年の改修工事（以下、第一次改修とする）、2009年から2011年にかけての改修工事（以下、第二次改修とする）が実施され現在の姿となった（図1）。第一次改修時の様子はほとんど残されていないが、『建築と社会』1984年8月号の記事から当時の相合橋をとりまく環境、改修計画の思惑を読み取ることができる。大阪市の政策や道頓堀川周辺の変化は、相合橋の構造や装いにどう反映されたのか、2度の改修を比較しながら再読したい<sup>(註1)</sup>。

### ■道頓堀川開削と相合橋の架橋

道頓堀川は堀川の汚濁解消と物流向上を目的に、1612年に成安道頓<sup>なりやすどうとん</sup>が新川奉行に命じられ、東横堀川と西横堀川を結んで木津川へ注ぐ堀川として開削が始まり、1615年に完成した。当初は南堀川と呼ばれたが、開削の中心であった道頓の名から「道頓堀」と命名される<sup>(註2)</sup>。

相合橋が架けられたのは貞享年間(1684~1688)で、1687年の『大坂大絵図』には現在の相合橋と同位置に新中橋という橋が確認でき、18世紀初頭に相合橋と呼ばれるようになった。地域の愛称として呼ばれ始め、やがて橋名として定着したのだろう。由来については、芝居役者と花街の芸者の出会い橋という説もあるが定かでない。また、相合という艶のある名前を持ちながら縁切り橋とも呼ばれ、婚礼行列で

は嫌われる橋であった。いずれにしろ周辺住民の生活には欠かせない橋であり、第二次世界大戦での焼失時には地元の強い要望で寄付を募り、大阪市によって木橋で再建されている。そして市内橋梁では比較的遅い1962年に初めて鉄橋化され、橋長42m、有効幅員6m、3径間単純合成桁橋として開通した。

### ■第一次改修への経緯

最初の改修工事は1983年に実施される。道頓堀川ではさまざまな水質改善政策が実施されてきた。1967年には汚濁対策と高潮防御を目的に、舟形護岸を両岸に築き、ツツジやディコントラを植栽したグリーンベルトが完成する。1979年にはエアレーション（噴水）やウォーターカーテンが設置され、水質や景観が著しく改善した（図5）。また両岸に並ぶビル群も、巨大看板の設置やネオンサインの光でいっそう華やかになり、芝居・劇場の街からグルメにあふれたエンターテインメントの街へと変貌した。一方で相合橋は橋面や高欄の汚れが目立つようになり、6mの幅員は交通にも支障をきたすようになって、地域の商店街や組合からは次第に改装整備の声が高まっていった。

こうした橋梁の修景は道頓堀川だけではなく、大阪市全体が直面していた問題でもあった。高度経済成長期は全国でインフラ整備が進んだが、ことに大阪は1970年の日本万国博覧会開催もあって活況を呈し、新十三大橋（1966年）や豊里大橋（1970年）などの長大橋が相次いで建設された。万博閉幕以降、今度は都市開発見直しの一環として、都市景観に配慮した橋梁計画が図られるようになる。大坂橋（1973年）、川崎橋（1978年）、飛翔橋（1984年）など市民生活に寄り添った歩行者・自転車専用橋が建設され、銚流橋（1980年）や梅檀木橋（1985年）は、中之島の近代建築群との調和を意識したデザインへと改修された。また水晶橋と錦橋は、それぞれ1982年と1985年に可動堰

から橋梁化され、橋面に植栽やベンチが置かれて憩いの場へと改修されるなど、1970年代から80年代にかけて市内各所に個性豊かな橋が誕生した<sup>(註3)</sup>。そして相合橋でも繁華街ならではの橋にしようと、改修計画が動き出したのである<sup>(註4)</sup>。

## ■水上広場への整備

第一次改修では「水上広場の創造」をテーマに、橋の機能改善と周辺環境との調和に重点を置き、通行は歩行者と自転車、緊急車両などに限定された。改修の詳細を『建築と社会』1984年8月号の特別レポート「水上広場としての第一号の橋 -相合橋の修景整備-」と「水上広場の相合橋」から見てみたい。全体計画では、まず広場とするために在来橋を拡幅し、①平面形状、②橋面意匠、③構造設計の3点が検討された。

①平面形状は、在来橋の幅員6mをどこまで拡幅するかを課題としている。中央径間は、景観上のバランスを考慮して径間長16mを基準に上下流へ5.5mずつ拡幅、最大幅員17.6mの正方形に近い形状に決定する。側径間はそれぞれの官民境界線まで拡幅し、南側で12.1m、北側で10.1mの幅員が確保された(図3)。このとき用地の制約から南北の取付部が対角線上に位置する形となり、現在の相合橋にもみられる平面非対称の独特な形状となる。以上の条件を満たした3つの概略案が提案され、そのうちC案が採用されている(図4)。

②橋面意匠には繁華街の雰囲気 matches する明るさが求められ、舗装材料はレンガタイルが選択された。橋面は幅20cmの御影石を2mごとの格子状に区画し、黄土色と赤褐色のレンガタイルを敷設している(図5・6)<sup>(註5)</sup>。梅樫木橋や銚流橋のレンガタイル舗装が、大阪市中央公会堂の化粧煉瓦壁に調和するクラシックな印象を与えるのに対し、相合橋は舗装面積も広く華やかさが際立っている。橋面の緑化は取付部周辺に集中的な植樹を行い、川沿いのグリーンベルトとの連続感を生み出している。広場にはベンチを兼ねた植樹柵と4灯式照明灯を中央に2基、取付部に1基ずつ設け、デザインは地域の歴史から日本調の行燈型としている。

③構造設計については、在来橋の構造では道路橋示方書を満足していない点があったが、老朽化や目立った破損がなく比較的健全であったこと、通行者を限定したことからの在来橋を利用する計画とした。ただし、橋脚へは新設した植樹柵による過重増加があるため、拡幅部にPC杭を打設し、耐荷力不足を補い、曲げ耐荷力を増加させるため鋼板による補強が行われた。

## ■第二次改修への経緯

第一次改修後の相合橋に大きな影響のあった出来事は「とんぼりリバーウォーク」の遊歩道整備だろう。水都大阪の再生プロジェクトの

一環として、2013年に日本橋から浮庭橋まで約2kmの遊歩道が整備された<sup>(註6)</sup>。船運の活性化は親水性を一層高め、水辺から橋を臨む機会が増加した。周辺の橋も連動して、太左衛門橋が2004年と2008年に木を基調とした側道橋を整備し、戎橋は2007年に現在の円形橋へと架け替えられている。

相合橋でも橋面の経年劣化や耐震性能向上の必要が生じていた。広場への放置自転車も問題視されていたが、これについては2009年に市がミナミの広範囲を放置自転車禁止地区に設定したこと、千日前通りなどに駐輪場を整備したことが功を奏し、相合橋を駐輪場にするケースは減少傾向にあった。そこで、より良い水上広場へと再生する第二次改修計画が持ち上がり、2009年から2011年にかけて①修景整備、②橋面意匠の改修、③下部耐震補強が実施される。計画では、まず耐震化工事を優先に行い、その間に周辺地域の振興町会や組合の代表者を加えた「相合橋橋面整備デザイン検討会」で橋面意匠が検討された。

## ■昼と夜の相合橋

遊歩道の整備にともない舟形護岸は撤去し、階段が設置されて遊歩道と橋上との回遊性が高まった。そのため①修景整備の基本方針として、橋と遊歩道を視覚的に一体化し、色調は一新してシンプルでモダンなデザインとすることが盛り込まれた<sup>(註7)</sup>。全体のデザインは高欄から橋下面、橋脚などをシルバー色(アルミ色)の縦格子で統一して橋全体が直線を強調している。高欄笠木を曲線にして中央で交差させているのは、江戸時代から続いていた兩岸の街の交わりやつながりを受け継ぐメッセージが込められているからである。(図1)。

②橋面意匠の改修では、橋面舗装は遊歩道と同じ石調としている(図7)。高欄のシルバー色と同調し、太陽が高くなると広場にはほとんど影が生じないため、高欄や舗装の照り返しでとても明るい。一方で、夜になると遠景の明るい戎橋周辺とは一線を画し、照明灯の琥珀色の光が橋面を照らして幻想的である(図11)。広場は植樹柵や照明灯を撤去、取付部付近に植樹帯を集約し、照明灯も植樹帯の中に移されて最大限に広さが確保されている(図12)<sup>(註8)</sup>。懸念されていた放置自転車については、改修計画段階で相合橋に駐輪場を設置しない方針としたが、現在も概ね良好で、遮蔽物がないことで駐輪しにくい橋面空間を作り出しているように感じる。下部に石材を使用した和風デザインの照明灯は、灯色とともに昔の雰囲気を醸し出している。

広場の四隅、すなわち兩岸の上下流に設けられた4つの階段下は倉庫として利用し、上流側(東側)の壁を橋面と同じ石調、下流側(西側)はガラスブロックとしている。日中は目立たないが、夜になるとガラスブロック全体が発光して存在感が際立つ(図9)。

③下部耐震補強では、橋脚の補強と沓座拡幅が行われた。橋脚はパイ

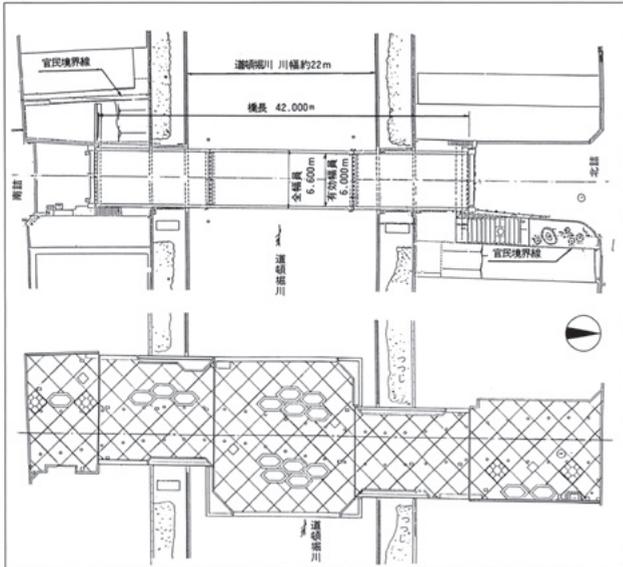


図3 整備前の平面図(上)、整備後の平面図(下) (第一次改修)

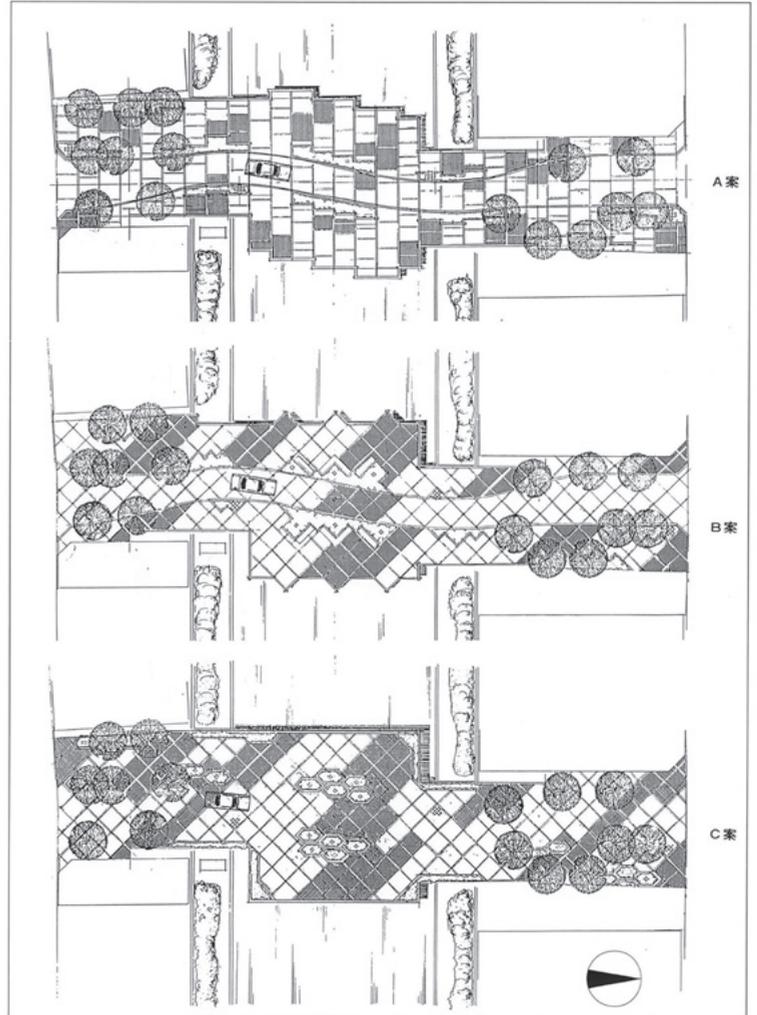


図4 平面形状の比較 (第一次改修)

図版出典：図1、7、9～13は筆者撮影  
※2～6、8は「建築と社会」1984年8月号より



図5 噴水のある道頓堀川に修景整備された相合橋 (第一次改修)



図6 橋面舗装のようす (第一次改修)



図7 橋面舗装のようす (第二次改修)



図8 橋面鳥瞰 (第一次改修)

ルベント橋脚であるため地震時の耐力不足が生じていた。そこで橋脚部背面を盛土構造とし、側径間部に杭を増設して橋脚を補強している。また水辺空間への開放感を演出するため、橋脚に開口部を設けて照明を設置し、夜間景観と水辺遊歩道空間の安全性を向上している（図13）。

## ■おわりに

相合橋は、周辺環境の変化に合わせて改修されてきた。橋上では昼夜を問わず、道頓堀川の景色を撮影する人、待ち合わせの人、路上ライブを行う人などの光景が見られる（図10）。また商店街のイベントや橋洗いなども広場で実施され、橋を通じた交流が続けられている。近年は日本橋付近が観光バスの乗降スペースとなっており、相合橋に近い道頓堀商店街東ゲートを利用する海外観光客も増加している。広場としての相合橋の需要は、今後さらに高まると推測される。

かつて大阪の経済を支えた堀川は、社会構造の変化でほとんどが埋め立てられ、多くの橋が姿を消し、東横堀川・道頓堀川などが残るだけとなった。相合橋の水上演習場から見える景色は「水都」大阪の歴史、そして賑わいある現在の「大阪らしさ」を凝縮した大阪の文化的景観といえる。

（註1）第一次改修は、『建築と社会』1984年8月号の「水上広場の相合橋」12-13頁および「特別レポート/大阪の橋と修景 水上広場としての第一号の橋-相合橋の修景整備-」14-16頁、第二次改修は、「道頓堀川水辺整備に合わせた相合橋の改良」『平成23年度大阪市建設局業務論文集』（大阪市建設局 2012年）を参考とした。

（註2）安井道頓とも呼ばれるが、本稿では近年通説である成安道頓とした。

（註3）松村博『大阪の橋』（松籟社 1987年）30-31頁

（註4）修景整備設計は大阪市土木局、新日本技術コンサルタント、施工は大末建設、富士車輛が請け負っている。

（註5）歩車分離のためスツール兼用の駒止めを2m間隔に設置。

（註6）太左衛門～相合橋は2008年、日本橋橋～相合橋間は2009年完成。

（註7）周囲と色彩や個性を競わず、形態を主張しない透明性のあるデザインとする方針がとられた。

（註8）橋のいわれを記した石碑も広場から北詰へ移されている。



図9 夜の相合橋を西側から撮影（第二次改修）



図10 夜の相合橋上から西の太左衛門橋方向を撮影（第二次改修）



図11 夜の橋上のような様子（第二次改修）



図12 橋上の植樹と照明灯（第二次改修）

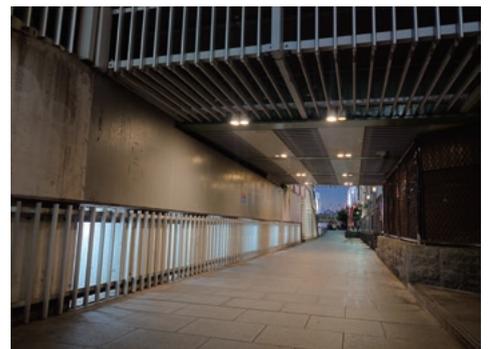


図13 夜の橋面下通路（第二次改修）

## 第38回『茶室』見学会

日 時：2025年12月6日(土) 見学会 13:30~16:00  
 場 所：大徳寺三玄院「篁庵」(京都府京都市北区紫野大徳寺町76)  
 参加者：22名(会員12名、一般10名)  
 参加費：会員 4,000円、一般5,500円  
 講師：桐浴 邦夫 先生(京都建築専門学校 副校長)  
 ご協力：長谷川大真 和尚(三玄院)  
 協力委員：奥村委員長、豊田委員、中尾委員、寺西委員、糸原委員、森下委員

2025年12月6日(土)、第38回茶室見学会が、京都大徳寺の塔頭三玄院の茶室、篁庵で開催されました。当日は、前日までの寒波とは打って変わり、雲一つない晴天に恵まれ、予定22名の皆さまが欠席することなく参加していただくことができました。

篁庵は古田織部好みとされ、藪内家の燕庵写しの茶室で、今回も桐浴邦夫先生から茶室内で説明をして頂き、本堂では長谷川大真和尚から三玄院の歴史や襖絵や位牌、お庭の詳しい説明と、短い時間ではありましたが大変有意義な時間を過ごすことができました。また、次回の茶室見学会を楽しみにしたいと思います。

ご参加いただいた皆様、本当にありがとうございました。

豊田充広／高松建設株式会社



本堂にて三玄院の由緒を語る和尚



広縁にて説明に聞き入る参加者

故郷や学生時代は有名な寺社仏閣がすぐ近くにあり、日本の伝統建築に対しては以前から親しみがありました。こと茶室に関しては敷居の高さを感じていました。今回初めて茶室に入る体験し、その空間のもつ素晴らしさに感動しました。まだ奥深い茶室の世界の一端を知ったに過ぎないのですが、貴重な体験ができました。篁庵だけでなく、三玄院の石庭や襖絵も拝見でき、参加者の皆様も満足された様子で良い見学会になりました。

奥村朋孝／株式会社鴻池組

今回初めてスタッフとして参加し、茶室の奥深さに触れる貴重な機会を得ました。大徳寺や三玄院では、和尚の丁寧な解説により、枯山水や襖絵に宿る歴史と美意識を体感しました。

桐浴先生による篁庵の解説では、茶室が持つ歴史的背景と現代に通じる建築思想に深く感銘を受けました。利休の目指した「わび」(モダニズム)と、それを超えようとする古田織部の精神は、現代建築の思想と共通する興味深い視点であり、日本の建築文化の根幹を改めて認識することができました。

森下大右／森下大右建築設計事務所

今回初めて茶室見学会に参加させていただきました。本堂や庭園・襖について和尚様に丁寧にご説明いただき、とても勉強になりました。特に桐浴先生の茶室の説明では「茶室では人間みな平等」というお話が印象に残っています。天井の高さや、天井・畳の材料を座る人によって変えることで、身分の異なる者が同じ空間で過ごせる工夫がされていることに驚きました。短い時間でしたが、とても充実した見学会でした。

糸原佳奈／株式会社きんでん



挨拶をする奥村委員長



喚鐘の説明をされる長谷川和尚

本会を通じ、参加者の皆様からは図面や書物だけでは測り得ない、三次元の空間が放つ実感的な気付きが多く寄せられました。特に、自分の差に関わらず一座の調和を生むための天井高や畳素材の使い分けといった、茶室建築に込められた「平等」の精神への解説は、現代建築の思想にも通じる深い視点として多大な共感を呼んでいました。また、通常非公開である篁庵における燕庵写しの三畳台目と相伴席の構成、八つの窓が織りなす光の陰影に加え、本堂を彩る原在中の力強い襖絵や、禅の美意識が凝縮された枯山水「昨雲庭」の佇まいは、五感を研ぎ澄ます極めて貴重な体験となったようです。アンケートでは「龍光院・密庵」や「南禅寺別荘群」の見学、さらに露地の解説を望む具体的な声が多く寄せられました。これらの熱意ある期待を今後の活動の指針とし、日本の建築文化の真髄を共に学び、刺激し合える充実した場をこれからも繋いでいきたいと考えております。

文責：事務局



(左奥から) 奥村委員長、寺西委員、豊田委員、森下委員、中尾委員、(左前から) 糸原委員、長谷川和尚、桐浴先生



### U-35委員会企画

### 「建築と集合知」

### ー「集合知」で考える、かけ算ワークショップー 活動報告

異業種・多様なバックグラウンドを持つ参加者が集まり、互いの知見や経験を共有・融合することで、新たな視点やアイデアを得るワークショップを企画しました。

OU-35委員会ホームページ  
新着情報や過去の活動報告も  
ご覧になれますので、  
ぜひ一度お立ち寄りください。  
<https://www.aaj.or.jp/u35>



OU-35委員会Instagram  
活動内容やメンバーの雑感など  
ざっくばらんに情報をアップ  
しています。  
<https://www.instagram.com/u35.aaj/>



建築は、一人の設計者だけで完結するものではなく、多様な専門家との協業を通じて形づくられるものである。各プロジェクトにはいくつもの到達点があるが、さまざまな知識や経験を持ち寄り、アイデアを磨き上げていくことで、私たちは建築が「社会性を帯びた集合知」として生まれると考えている。

昨年度の「U-35 Under35 Architects Exhibition 2024」では、初めて「建築と集合知」をテーマとしたトークセッション+イベントを開催した。その取り組みを単発の企画で終わらせるのではなく、継続的な活動として積み重ねていくことで、さまざまな分野をつなぐプラットフォームへと育てることができると考えている。その思いから、「建築と集合知2025」を開催した。今年度の取り組みでは、メーカー各社が持つ製品を題材に、参加者が企業の枠を超えてフラットに議論する「集合知で考える掛け算ワークショップ」を実施した。多様な視点と専門性が交わることで、既存の価値を掛け合わせながら新たな可能性を探る場となった。（文責：大屋）

#### ■ワークショップの内容

異業種・多様なバックグラウンドを持つ参加者が集まり、互いの知見や経験を共有・融合することで、新たな視点やアイデアを得るワークショップを企画した。各自が持参したサンプルを交換し、初めて見るサンプルを手に参加者同士で使い方や組み合わせ方のアイデアを出しあう。自身の持つ専門的な知見を活かした建築的なものから、趣味・特技から生まれるユーモアのある使い方など、異業種が集まることでこそ生まれる発見・成果を各自の職場や業務に持ち帰り、実践的に活用することで、新たな価値創出につながることを期待した。（文責：北村）

#### ■ワークショップの流れ

- 事前準備 ・参加者は自社製品のサンプルを持参。金具やハギレなど、何でもOK！
- STEP1 グループ分け  
・5つのグループに分かれて自己紹介
- STEP2 サンプル交換  
・サンプルを別グループの方と交換  
・各々が初めてみるサンプルを手にする
- STEP3 かけざんワークショップ  
・受け取ったサンプルについて、本来の使い方以外にこんなことに使えるかな？自社の製品と受け取ったサンプルを掛け合わせたらこんなことができるかな？など新しいアイデアを見つける
- STEP4 各グループ1案にしぼって発表  
・サンプルを持ってきた方から実際の使い方を説明  
・各グループで考えたアイデアを共有

#### ■A班

A班のテーブルにはアルミキャスト、家具の張地、タイルカーペット、セメント素材の外装材、照明器具など多様なサンプルが並んだ。その中でも特に多くの創造的なアイデアが出たのは、ゴム製の靴箱の仕切り板である。「形」に着目したアイデアや、「材質」に注目したアイデアなど、メーカーごとに異なる視点から多様な発想が生まれていた。「軽量である」という特長から「持ち運びやすい」「フリーアドレスオフィスで活用したい」と発想が広がり、さらにゴム製で絶縁体である点を踏まえて、持ち運び可能なテーブルランプとして活用できるのではないかというアイデアに展開していく過程が印象的だった。シンプルな長所を起点に、経験や専門知識を活かして具体化していく思考を見ることができた。（文責：白井）

#### ■B班

B班のテーブルにはカーテンやロールスクリーンの端材、特徴的な柄のタイルカーペットなど軽く柔らかなファブリックから、インターロッキングや大型レンガといった重量と強度をもつ素材まで、多様なサンプルが並ん



まずは各自で検討



各班で議論



A班の発表サンプル



B班の発表サンプル

だ。中でも注目を集めたのは、大型レンガに設けられた楕円状の穴である。通常は下地を通す機能的なディテールだが、「穴の面を見せて積む」「筆記用具が立てられそう」といった建材や家具への転用案に加え、「動物が住み着きそう」「植物を植えられそう」といった意見もあった。レンガを持参したメーカーから素材そのものかっこよさが語られていたこともあり、土を原料とする自然素材である点や、還元焼成による不均一なテクスチャといった物質的な魅力が、表裏を意識しない見方につながったのかもしれない。さらに、「穴のない面に寿司を置き、穴にガリを置く」といったユーモアのある意見も出て、リラックスした雰囲気でも角的な使い方が想像されていた。

(文責：平田)

### ■C班

C班のテーブルには照明器具・パーティション・壁紙・タイルカーペットなど内装材やアルミサッシなどの多様なサンプルが並んだ。C班で最も注目を集めたサンプルは、杉丸太を製材するときに出る端材を活用したパネル状の積層集成材であった。木表を内部に向けて集成材としていく過程で空洞が生まれ、軽量化などに役立つという特徴あるサンプルであったが、議論の中で、空洞部にワイヤー等を通すことによって可動式のテーブル天板などに活用できるのではないかというアイデアが生まれた。また、空洞の形状によっては照明器具やサインなど様々な分野に転用できるかもしれないと想像が膨らんだ。(文責：永本)

### ■D班

D班のテーブルには壁紙、合板、タイル、サッシの方立、緞帳の端材、間仕切りフレームなど、質感やスケールの異なるサンプルが並んだ。まずはそれらのサンプルを、順次手

に取り、色々な角度から観察し、思いつくコトバをグループで共有してみた。既存の用途に捉われない難しさを感じながらも、多くのアイデアが出てきたのがサッシの方立である。他のサンプルとかけ合わせた使い方や、H型の断面を活かして、モノを吊る、照明を仕込む、アート壁面とするなど、バリエーションに富んだ使い方を見出すことができた。特に、自身が関わっている製品との関連性や発展性についてはメーカー独自の着眼点であると感じた。設計者とメーカーのコラボレーションはよく耳にするが、メーカーとメーカーが協働して製品開発することには馴染みがない。床・壁・天井・照明など、それぞれの強みを活かした協働の在り方に可能性を感じている。

(文責：三井)

### ■E班

E班のテーブルには、家具や壁の仕上材、建材の受け材などが並び、自然と素材の可能性や形状の展開についての議論が中心となった。中でも注目を集めたのは、内部が空洞でねじれた形状をもつ金属棒である。持参した金物メーカーによれば、これは鋼製角柱をねじる試験的なサンプルとのことだった。空洞部分に着目し、内部に照明を組み込んだインテリアへの応用案や、ねじれた形状を活かしたルーバーや間仕切りといったアイデアが挙げられた。さらに、材質を変えた場合や、ねじれの疎密をコントロールできた場合にどのような可能性が広がるのかといった議論へと発展し、各領域を横断する発想が生まれた。多様なメーカーと設計者が一堂に会し、素材の可能性を議論するという滅多にない機会を経験でき、大きな刺激を受けた。(文責：萩尾)

### ■トークイベント・座談会を終えて

総勢50名を超える異業種・多様なバックグ

ラウンドを持つ参加者にお集まりいただいたワークショップだったが、終始和やかで活気ある雰囲気であった。違う視点で1つのこと(1つのサンプル)について考えてみる面白さを体験していただくことで、「集合知」のさらなる可能性についても考えるきっかけになったと思う。さらに、ワークショップの目的であった「お互いの知見や経験を共有・融合することで、新たな視点やアイデアを得ること」に加え、組織の枠を超えて相談や共創ができるネットワークが形成されたと実感している。

(文責：大西)

### ■参加者 ※敬省略

石原 淳司 (東芝エレベータ株式会社)/伊藤 智彦 (パナソニック株式会社)/伊奈 拓哉 (コマネー株式会社)/岩永 梨花乃 (株式会社スミノエインテリアプロダクツ)/後田 泰斗 (YKKAP株式会社)/荻野 貴大 (コマネー株式会社)/刑部 もあな (株式会社オカムラ)/川頭 佳那 (コイズミ照明株式会社)/川端 美濤 (日本興業株式会社)/川村 耕一 (株式会社エービーシー商会)/神原 奈穂 (リリカラ株式会社)/北杉 蘭 (株式会社川島織物セルコン)/小泉 梨央 (株式会社スミノエインテリアプロダクツ)/近藤 潤一 (株式会社ユニオン)/佐々木 七海 (リリカラ株式会社)/柴田 雄平 (ルノン株式会社)/鈴木 ひかり (株式会社平田タイル)/高山 亮平 (小松ウオール工業株式会社)/竹内 静花 (日本興業株式会社)/辻村 涼香 (アイカ工業株式会社)/藤後 陸 (株式会社オカムラ)/友納 和瞭 (ケイミュー株式会社)/中尾 苑夏 (株式会社川島織物セルコン)/中川 華世香 (株式会社平田タイル)/中田 大貴 (東リ株式会社)/永友 大希 (不二サッシ株式会社)/中村 裕美 (丸善雄松堂株式会社)/西村 彰悟 (東リ株式会社)/二宮 菜子 (ケイミュー株式会社)/根井 勝貴 (株式会社内田洋行)/野口 修司 (株式会社内田洋行)/則永 拓夢 (株式会社国代耐火工業所)/林 美由希 (株式会社ユニオン)/東 佳太 (株式会社サンゲツ)/日永 沙也加 (株式会社イトーキ)/藤田 亜弥子 (株式会社エービーシー商会)/堀之内 有希 (株式会社イトーキ)/南谷 優輝 (株式会社エスウッド)/森 俊輔 (東芝エレベータ株式会社)/森 優 (コイズミ照明株式会社)/山本 夏実 (アイカ工業株式会社)

U-35メンバー：市川 雅也 (株式会社竹中工務店)/大西 琴子 (株式会社日建設計)/大屋 泰輝 (株式会社大林組)/奥野 湧太 (株式会社RIA)/河崎 菜摘 (株式会社竹中工務店)/北村 政尚 (株式会社東畑建築事務所)/白井 美実 (株式会社昭和设计)/永本 聡 (株式会社日建設計)/萩尾 涼太 (株式会社大建設計)/平田 翔子 (株式会社東畑建築事務所)/三井 貴裕 (株式会社安井建築設計事務所)



C班の発表サンプル



D班の発表サンプル



E班の発表サンプル



座談会の集合写真

個人会員の皆さまへ

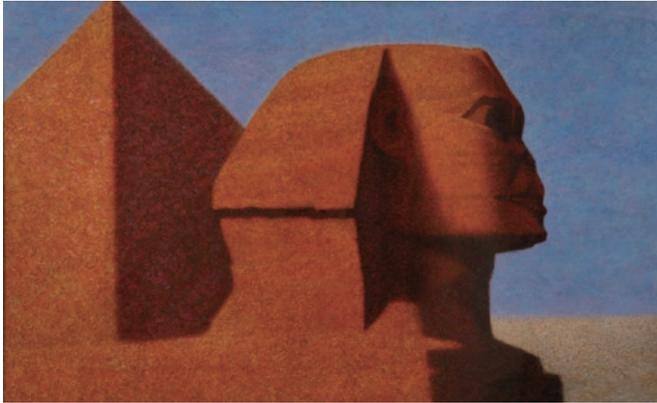
# ご応募お待ちしております。招待券プレゼント！

応募フォームは協会ホームページの会員専用ページ内にあります。

応募期限は毎月20日、厳正に抽選して当選者を決定します。(初回申込者を優先いたします。)

## ① 昭和100年記念 あの頃は ～栖鳳・魁夷・又造らが起こした昭和の風～

激動の昭和を彩った画家たちの100点の名作



杉山寧《悠》昭和38年 福田美術館蔵 通期展示

昭和100年という節目の年を記念し、昭和時代に描かれた選りすぐりの100点の作品を展示する。1926年から1989年まで64年間に及んだ昭和という時代は、戦争と復興、高度経済成長、バブル景気と、貧しさも豊かさも併せ持つ激動の時代であった。美術もまた、その時代の風と無縁ではなかった。

明治・大正を生き抜いた竹内栖鳳(たけうちせいほう)、横山大観(よこやまたいかん)らが円熟期を迎えた戦前、厳しい時局の中で活動を続けた戦中、そして東山魁夷(ひがしやまかい)や杉山寧(すぎやまやすし)ら若い世代が、逆風を受けながらも未来へと前進した戦後——昭和の美術は、時代ごとにまったく異なる表情を見せている。

100点の作品を通じて、意欲と熱気に満ちたあの特別な時代の風が嵐山に吹き渡る。

期 間 4月12日(日)まで  
〈前期〉～3/2(月) 〈後期〉3/4(水)～4/12(日)  
10:00～17:00  
※入館は閉館の30分前まで

休 館 日 2/17(火)、3/3(火)、3/17(火)  
観 覧 料 一般1,500円、高校生900円、小・中学生500円  
\*障がい者と介添人1名まで各900円  
\*幼児無料  
\*20名以上の団体は各料金から100円引き

会 場 福田美術館  
京都市右京区嵯峨天龍寺芒ノ馬場町3-16  
TEL.075-863-0606



## ② KYOTO NIPPON FESTIVAL 2026

5組 -時をこえ、華ひらく庭-

北野天満宮で幻の大茶会を体感



2016年に誕生し、日本の「美」と「文化」を京都から世界に発信してきたこのフェスティバルは、由緒ある北野天満宮において、毎年多彩な文化プログラムを展開、今年10周年を迎えた。

春の訪れとともに咲き誇る北野天満宮の梅苑「花の庭」を舞台に、蜷川実花 with EiMによるインスタレーションを実施。自然とアートが融合した幻想的な空間で、鮮烈な体験を提供する。



3月20日(金・祝)～5月24日(日)にかけては、イマーシブシアター「花宵の大茶会」を開催。蜷川実花が創り出す色彩豊かな世界と、ダンスカンパニーDAZZLEの身体表現が融合し、歴史・伝統・アートが交錯する唯一無二の体験を実現する。

※イマーシブシアター(公演)鑑賞には別途チケットが必要

期 間 2月1日(日)～5月24日(日)  
9:00～20:30  
※入場は閉場の30分前まで  
休 苑 日 会期中休業日あり(HPにてお知らせ)  
観 覧 料 大人3,000円、小人1,500円

会 場 北野天満宮  
雪月花の三庭苑・梅苑「花の庭」  
京都市上京区馬喰町  
TEL.075-461-0005



#竹内栖鳳#東山魁夷#加山又造#杉山寧#橋本関雪#池田遙邨

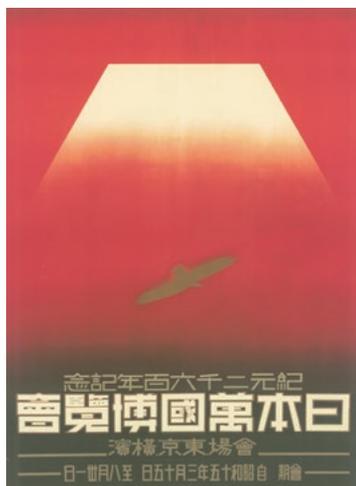
#日本の美と文化#10周年#蜷川実花#EiM#梅苑「花の庭」

会員IDやパスワードがご不明な場合は、日本建築協会総務課 (soumu@aaj.or.jp) までお問合せください。  
招待券は当協会より郵送でお届けいたします。  
当選発表は招待券の発送をもってかえさせていただきます。

information

③ 万博のレガシー —解体と再生、  
5組 未完の営為を考える—

創造と解体をくりかえす特異な祝祭空間



中山文孝《紀元2600年記念 日本万国博覧会 [ポスター]  
1938年 京都工芸繊維大学美術工芸資料館蔵 AN. 2694-37

万博の変遷は、19世紀から21世紀を迎えて四半世紀の現在に至る西洋近代主義のグローバル化の光の軌跡であると同時に、20世紀の2つの世界大戦に象徴される文明の影と不可分の歴史であると言えます。近年の万博では、参加者にも現代社会がはらむ数多の課題について考える姿勢が求められている。

本展は、創造と解体をくりかえす万博の特異な祝祭空間について2部構成でふりかえる。

第1部【万博と日本 グローバリズムの光と影】

第2部【メタポリズムと共生 黒川紀章のEXPO'70を中心に】

万博に託された理念や付随する今日的課題にもふれる本展は、万博のレガシー（遺産）について再考する機会となるだろう。

期 間 2月14日(土)～5月6日(水・休)

9:30～17:00

※入場は閉館の30分前まで

休 館 日 月曜日、2/24(火)、4/1(水)～4/5(日)

※2/23(月・祝)、5/4(月・祝)は開館

観 覧 料 一般600円、大学生330円

\*高校生以下、65歳以上、障害者手帳をお持ちの方は無料

\*2/28・3/28・4/25(第4土曜日)は大学生無料

\*3/1・5/3(第1日曜日)は無料

会 場 和歌山県立近代美術館

1階展示室

和歌山市吹上1-4-14

TEL.073-436-8690



④ 生誕100周年記念 安野光雅展

5組

ふしぎと発見の「安野ワールド」を体感!



『ふしぎな さーかす』1971年 (福音館書店)  
所蔵：津和野町立安野光雅美術館 ©空想工房

安野光雅は、1926年に自然豊かな島根県津和野町に生まれ、好奇心にあふれた、絵を描くことが大好きな少年だった。戦後は美術教員を務めながら、芸術や科学、数学、そして人の営みに興味を持って創作を続け、やがて比類なき画家となった。

本展では『ふしぎなえ』(福音館書店)、など代表作の絵本原画約130点に加え、安野が描いた「風景」「歴史」といった普遍的なテーマをとらえ直し、キュレーションするPLAY!独自の展示空間「絵画館」を設置。絵を拡大、立体にして視点を変化させるなど、多彩な仕掛けを通して安野が絵に込めたメッセージを体感できる会場構成とした。他、安野から影響を受け、現在活躍中のクリエイターたちの言葉で未来に語り継ぐ、映像「先生へ」を展示する。

見どころ ①貴重な絵本原画を展示

②「絵画館」で、画家安野光雅に出会う

③安野が描いた無限空想に入り込む巨大空間

④インタビュー映像「先生へ」を上映

期 間 3月4日(水)～5月10日(日)

10:00～17:00 ※土日は18:00まで

※入場は閉館の30分前まで

休 館 日 なし

観 覧 料 一般1,800円、大学生1,200円、高校生1,000円、  
中・小学生600円

\*未就学児無料

会 場 PLAY! MUSEUM

東京都立川市緑町3-1

GREEN SPRINGS W3棟2F

TEL.042-518-9625



## 編集企画委員会

### 第9回編集企画委員会

12月9日(火) 18:00~19:15

協会会議室&WEB

出席者 三宗委員長ほか11名

- 議事 (1) 1月号 計画分科会・状況報告  
 (2) 2月号 ひと・まち・建築小委員会・状況報告  
 (3) 3月号 東海支部・状況報告  
 (4) 4月号 各委員会・状況報告  
 (5) その他

### 計画分科会企画：藤本杜介氏インタビュー

12月24日(水) 9:00~10:00

協会会議室&WEB

ゲスト 藤本杜介氏(建築家)

出席者 指田会長、吉村委員、浦山委員、柏原事務局長

2023年の1月号から継続する万博の特集の総括として実施(2月号掲載)

「総論 大阪・関西万博の総括」

### 第8回建築デザイン分科会

12月1日(月) 18:00~19:30

協会会議室&WEB

出席者 松本幹事ほか6名

- 議事 (1) 4月号特集担当ページについて  
 (2) 8月号特集について  
 (3) その他

### 第8回環境分科会

12月10日(水) 18:00~20:30

WEB

出席者 橋本幹事ほか7名

- 議事 (1) 「設備の頁」の企画  
 (2) 5月号特集号について  
 (3) 4月号特集担当ページについて  
 (4) その他

### 第9回施工材料分科会

12月18日(木) 16:00~17:00

協会会議室&WEB

出席者 藤丸幹事ほか6名

- 議事 (1) 編集企画委員会の報告  
 (2) 4月号特集担当ページについて  
 (3) 4月号ふりかえり記事について  
 (4) 編集企画委員会出席について  
 (5) その他

### 第9回法令分科会

12月22日(月) 16:00~17:00

協会会議室&WEB

出席者 河野幹事ほか4名

- 議事 (1) 2026年特集テーマ「再生」について  
 (2) 法令コーナー  
 (3) 情報交換

### 第9回ひと・まち・建築小委員会

12月25日(木) 19:00~20:00

協会会議室&WEB

出席者 澤田小委員長ほか4名

- 議事 (1) 作品の選定  
 (2) 作品の掲載状況、予定  
 (3) gallery掲載報告、予定  
 (4) その他

## 出版委員会

### 第8回出版委員会

12月23日(火) 17:00~18:15

協会会議室&WEB

出席者 中尾委員長ほか7名

- 議事 (1) 出版に関する座談会について  
 (2) セミナー等について  
 (3) 制作進行中の書籍  
 (4) その他

## 未来創生プロジェクト

### 第7回U-35委員会

12月10日(水) 19:30~22:00

協会会議室&WEB

出席者 大屋リーダーほか13名

- 議事 (1) 新メンバー紹介  
 (2) 今後の活動について  
 (3) その他

## 講習会委員会

### 第4回講習会委員会

12月16日(火) 16:30~17:30

協会会議室

出席者 寺岡委員長ほか8名

- 議事 (1) テキスト改訂について  
 (2) 講習会詳細  
 (3) その他

## 実行委員会

### 第1回論考コンクール実行委員会

12月5日(金) 18:00~19:00

WEB

出席者 吉村委員長ほか4名

- 議事 (1) 実行委員会の体制について  
 (2) 第10回以降の審査委員について  
 (3) 第10回コンクールテーマ案 フリーディスカッション  
 (4) 第10回コンクールポスター制作について

### 第2回論考コンクール実行委員会

12月23日(火) 18:00~19:00

WEB

出席者 吉村委員長ほか3名

- 議事 (1) 第10回コンクールテーマと趣旨文について  
 (2) 第10回以降の審査委員について

## 見学会

### 第38回『茶室』見学会(情報見学小委員会)

12月6日(土) 13:30~15:30

見学先 大徳寺三玄院「篁庵」

講師 桐浴邦夫先生(京都建築専門学校 副校長)

参加者 22名

出席者 奥村小委員長ほか5名

学生のための現場見学会(建築次世代委員会)

株式会社東畑建築事務所 大阪草煙舎建替計画 工事見学会

12月17日(水) 14:30~16:30

見学先 株式会社東畑建築事務所 大阪草煙舎

講師 平野尉仁氏、広瀬和也氏、西辻帆波氏(株式会社東畑建築事務所 設計室)

参加者 8名

出席者 菅原小委員長、藤田委員

## 編集企画委員会 (2025年12月現在)

副会長(編集担当) (環境分科会)

川合 智明 大橋 巧

理事(編集担当) 北野 勝也

木場 将雄 齋藤 悠輔

佐藤 榮一 生野 大輔

中尾 勝悦 寺井 千佳

中原 岳夫 仲村 憲一

西 博康 △橋本 直樹

橋寺 知子 梶井 貴廣

松島 茂樹 松本 健

◎三宗 知之 持留 崇志

吉村 英祐 (施工材料分科会)

副委員長 今井 信之

桑原 悠樹 上原 秀介

古谷 隆祥 門野 陽

編集委員 河合 智寛

■特集小委員会 能瀬 直樹

△計画分科会 △藤丸 啓一

△飯田 匡 南野 貴洋

田中 直人 森田 健

松田奈緒子 吉田 正友

山崎 晋一 (法令分科会)

吉村 英祐 奥山 陽二

(建築デザイン分科会) 日下部美嘉

△桑原 悠樹 △河野 字

小林 敬政 時見 正人

小林 啓明 吉田 悠起

篠木 大輔 ■この巻の総論

杉江 順哉 浅田 翔太

田中 和八 伊藤 翔

田中 裕大 上田 寛彬

樋口 展寛 太田 栄治

平岡 翔太 加嶋 章博

△松本 和也 片岡 政規

米山 剛史 貴志 泰正

(空間デザイン分科会) 佐伯 先史

東 実千代 ▲澤田 純一

今井 充彦 榎野 淳司

河西 孝平 豊田 充広

神田 健吾 西田 佳代

△黒柳 亮 平野 尉仁

佐々木琉偉 増田 敬彦

清水 香澄 山本 和宏

宗田 菜々 (構造分科会) (順不同)

古島 正博 ◎委員長

榊原 啓太 ▲小委員会委員長

△正野 和司 △幹事・小委員会

瀧野 敦夫 副委員長

多田 全希

萩原 学

水島 靖典

藪田 智裕

山下 真輝

山本 佳明

吉村 純哉

### 【訂正とお詫び】

本誌2026年1月号P34に誤りがありました。

(誤) 総論3

(正) 各論3

確認不足でした。

訂正してお詫びします。

印刷 2026年1月26日

発行 2026年2月1日

発行人 一般社団法人日本建築協会

大阪市中央区大手前1-7-31

電話 06-6946-6981

印刷所 榊中島弘文堂印刷所

定価 1390円(税込)

©「建築と社会」誌の記事の無断転載を禁じます

**お客様の抱える問題やニーズに  
より速やかに、より丁寧に対応できるように**

企画・デザイン、制作、製版、印刷

株式会社 **中島弘文堂印刷所**

本 社 〒537-0002 大阪市東成区深江南2丁目6番8号  
TEL.06-6976-8761 / FAX.06-6976-8765

東京支社 〒101-0052 東京都千代田区神田小川町1丁目4-2 風雲堂別館ビル2階  
TEL.03-3526-5580 / FAX.03-3526-5582

<http://www.n-kobundo.co.jp/>

地球環境を守り、100年建築に貢献する

**NACL** のアルミ表面処理

株式会社 **日本電気化学工業所**

<http://nacl.jp> E-mail: [sc@nacl.co.jp](mailto:sc@nacl.co.jp)

本部営業部 〒560-0036 大阪府豊中市蛍池西町2丁目7番26号 NACLビル2階

TEL (06)6843-1235(代) FAX (06)6853-1632

東京事務所 〒111-0051 東京都台東区蔵前2丁目6-7

TEL (03)3862-0978(代) FAX (03)3862-7098

## 年間広告のご案内

協会誌「建築と社会」では、後付部分に  
広告スペースを設けております。  
1年を通じて、社名広告を掲載されませんか？

**掲載期間**：4月号～翌年3月号までの1年間

**掲載料**：48,000円（消費税込み）

**サイズ**：1/12頁（タテ40mm×ヨコ90mm）

※毎月掲載誌をご送付します。

※原稿は1年間同じ原稿を使用します。

お問い合わせ先

一般社団法人 日本建築協会 中内・井筒

TEL : 06-6946-6981 FAX : 06-6946-6984 E-mail : [koukoku@aj.or.jp](mailto:koukoku@aj.or.jp)



田中道子さん  
 今和4年度 一級建築士合格  
 総合資格のおかげで人生変わりました。  
 総合資格学院イメージキャラクター  
 令和4年度 一級建築士試験合格  
 当学院受講生・俳優  
 田中 道子さん

一分、一秒を積み重ねた日々。

信じられる環境だから、迷わなかった。

# 重要なのは、「近年」の合格実績！

## 直近10年間、総合資格学院は1級建築士合格者数日本一

1級建築士  
合格実績  
**No.1**

平成28～令和7年度 1級建築士 学科・設計製図試験



全国ストレート合格者合計14,345名中/当学院受講生8,493名

平成28～令和7年度 1級建築士 設計製図試験



全国合格者合計35,869名中/当学院受講生18,878名

\*当学院のNo.1に関する表示は、公正取引委員会[No.1表示に関する実態調査報告書]に基づき掲載しております。 \*総合資格学院の合格実績には、模範試験のみの受験生、教材購入者、無料の役務提供者、過去受講生は一切含まれておりません。 \*全国ストレート合格者数・全国合格者数は、(公財)建築技術教育普及センター発表に基づきます。 \*学科・製図ストレート合格者とは、1級建築士学科試験に合格し、同年度の1級建築士設計製図試験にストレートで合格した方です。(令和7年12月24日現在)

**総合資格学院**

〒163-0557 東京都新宿区西新宿1-26-2 新宿野村ビル22F TEL.03-3340-2810[法人営業推進室]

スクールサイト [www.shikaku.co.jp](http://www.shikaku.co.jp) 総合資格 検索

コーポレートサイト [www.sogoshikaku.co.jp](http://www.sogoshikaku.co.jp)

SNS X ⇒[@shikaku\_sogo] LINE ⇒[総合資格学院] Instagram ⇒[sogoshikaku\_official]

**開講講座**

1級・2級 建築士/建築・土木・管工事施工管理技士/設備・構造設計1級建築士/建築設備士/宅建士/賃貸不動産経営管理士/インテリアコーディネーター

**法定講習**

監理技術者講習/一級・二級・木造建築士定期講習/管理建築士講習/宅建登録講習/宅建登録実務講習/第一種電気工事士定期講習

建築学部・学科の受験情報や建築系大学の検索ができる高校生向けサイト

**be Architect**  
www.kenchiku-gakka.com



## 株式会社総合資格の人材サービス

採用(新卒・キャリア)でお困りの人事担当者様ご相談ください!

< 強固なネットワークでこのようなニーズにお応えします >

貴社の採用戦略に合わせ建設業界経験者や建設系有資格者をご紹介させていただきます!

(中途採用)お問合せはこちらのQRから→

**総合資格 career**

建設・不動産業界の転職支援サービス



建築・土木系学生登録数8,000名以上の就職支援プラットフォームに企業情報を無料掲載可能です!

(新卒採用)お問合せはこちらのQRから→

**総合資格 navi**



建設業界で転職をお考えの方ご相談ください!

< 転職支援サービス「総合資格 career」の特色 >

- ・他求人情報サイトに掲載していない各地域の優良企業まで幅広くカバー!
- ・長年の資格ビジネスで培ったノウハウを持つアドバイザーがあなたを担当!
- ・建設系領域に特化したキャリアアドバイザーによる適確な転職支援をさせていただきます!

(転職支援サービス)お問合せはこちらのQRから→

**総合資格 career**

建設・不動産業界の転職支援サービス

